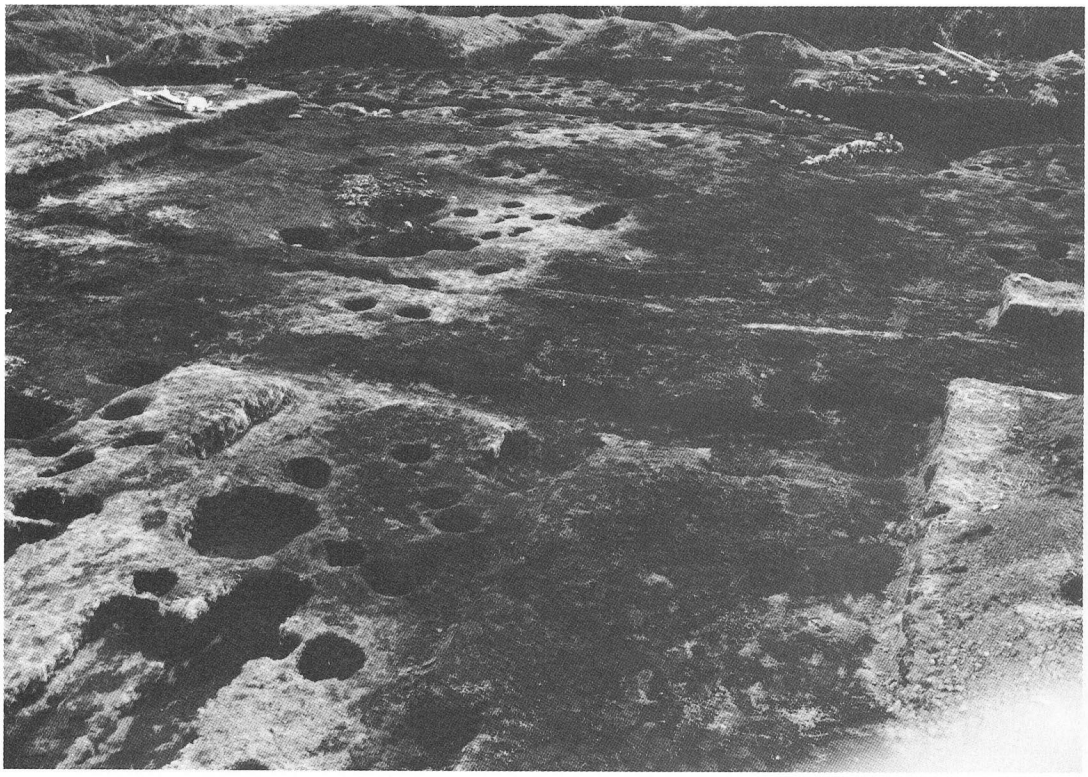
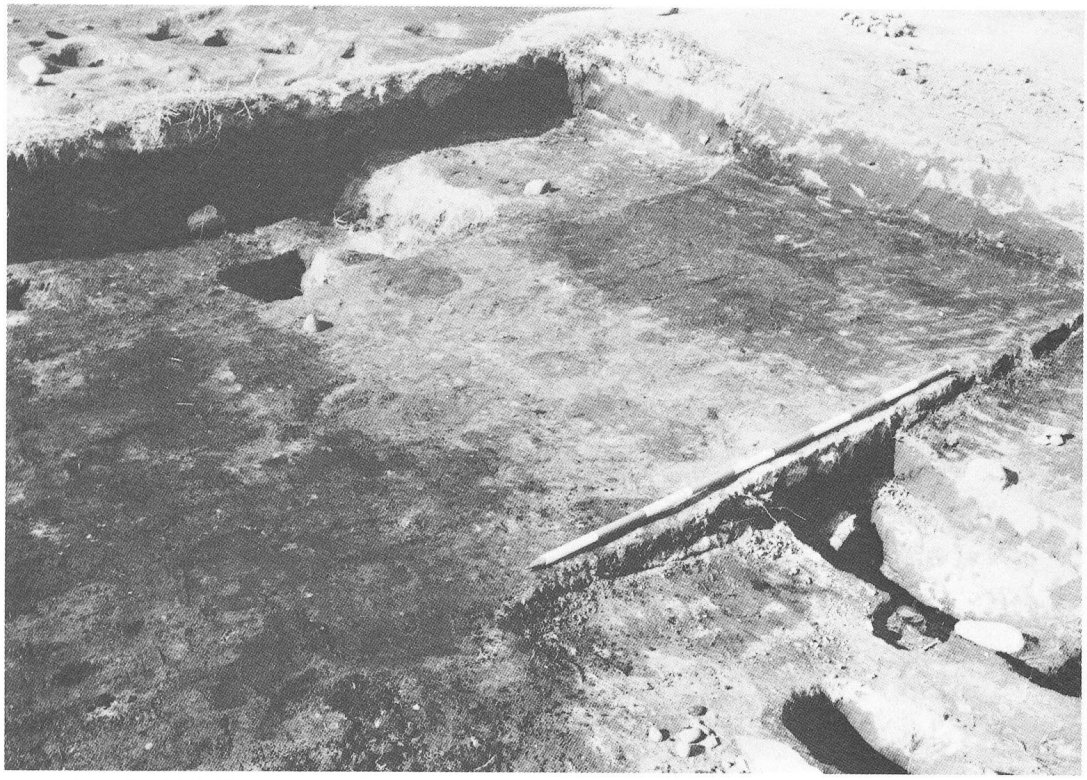
図版4

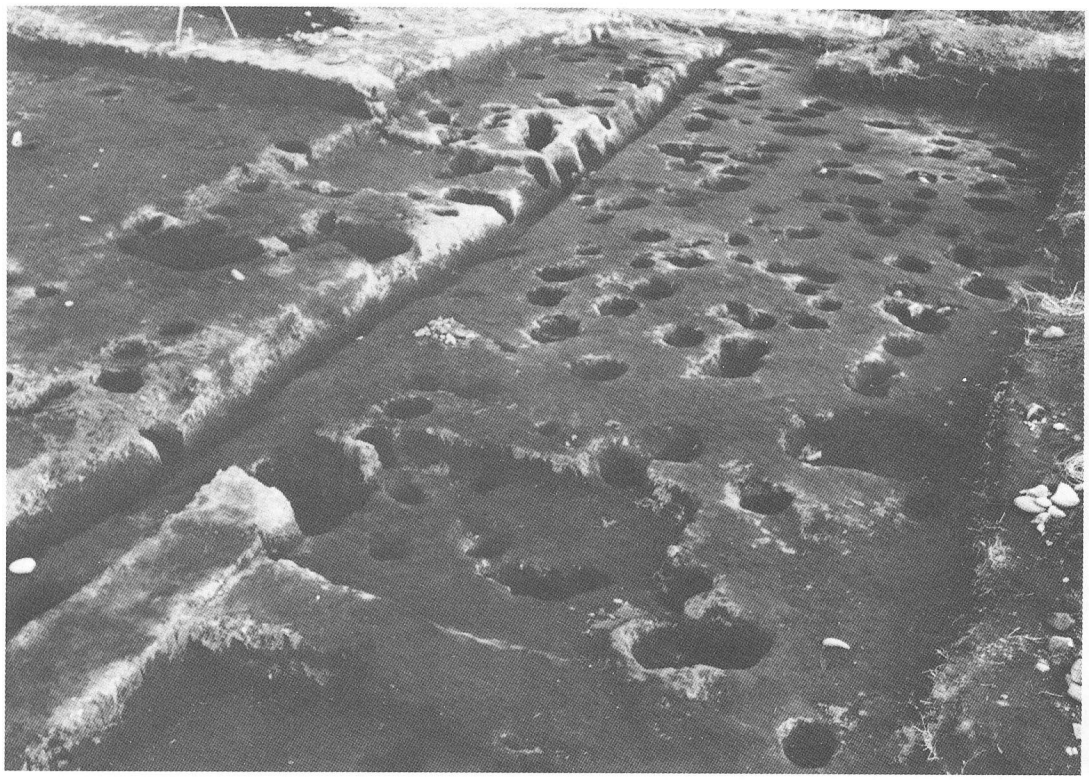
(1) 北平場西区(南より)



(2) 北平場西区(北より)

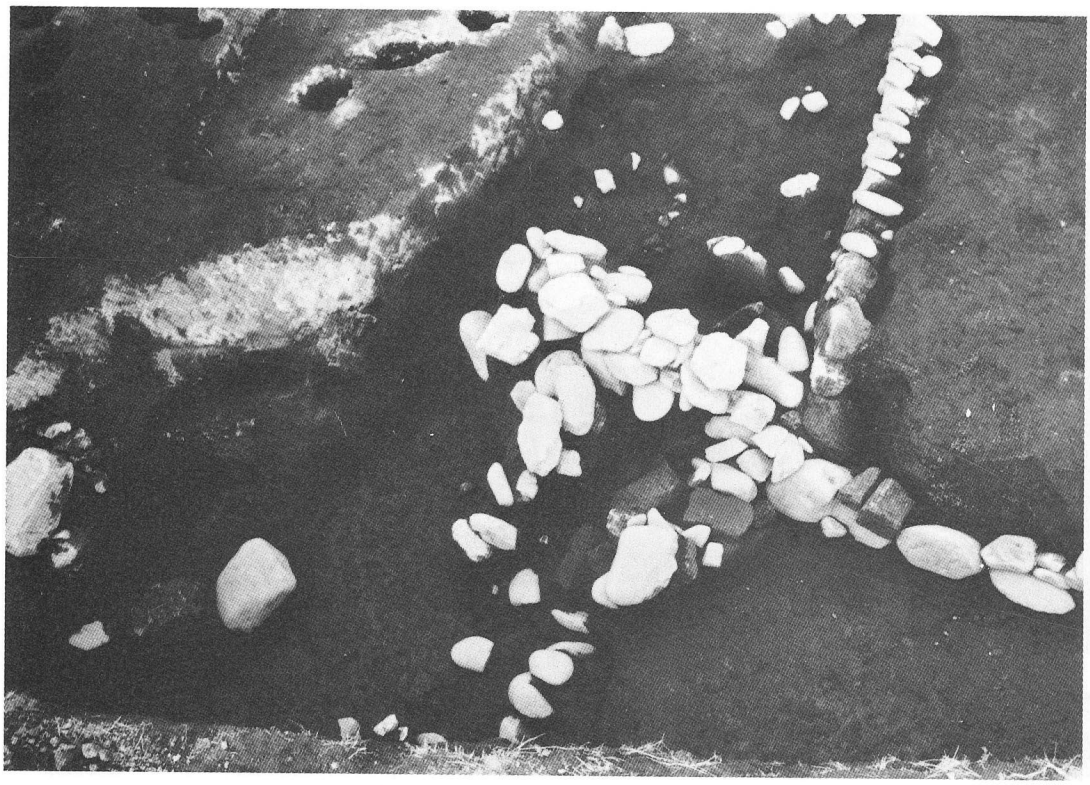
図版5

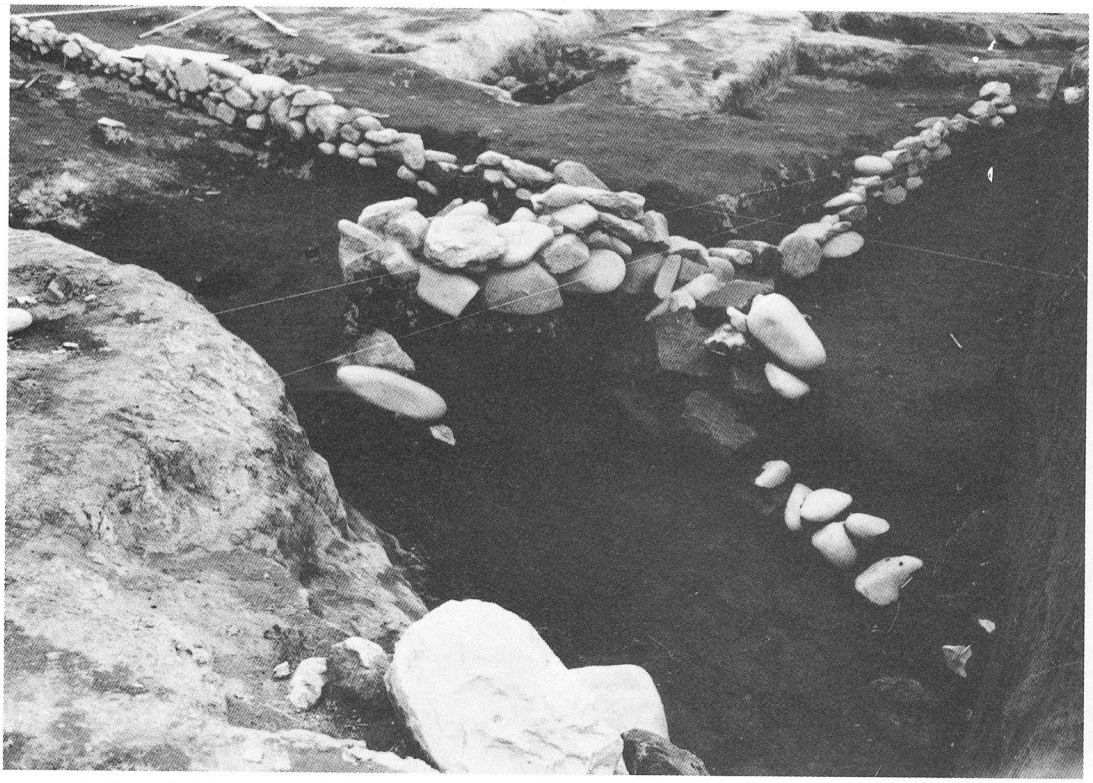




北平場西区Ｖ字状溝

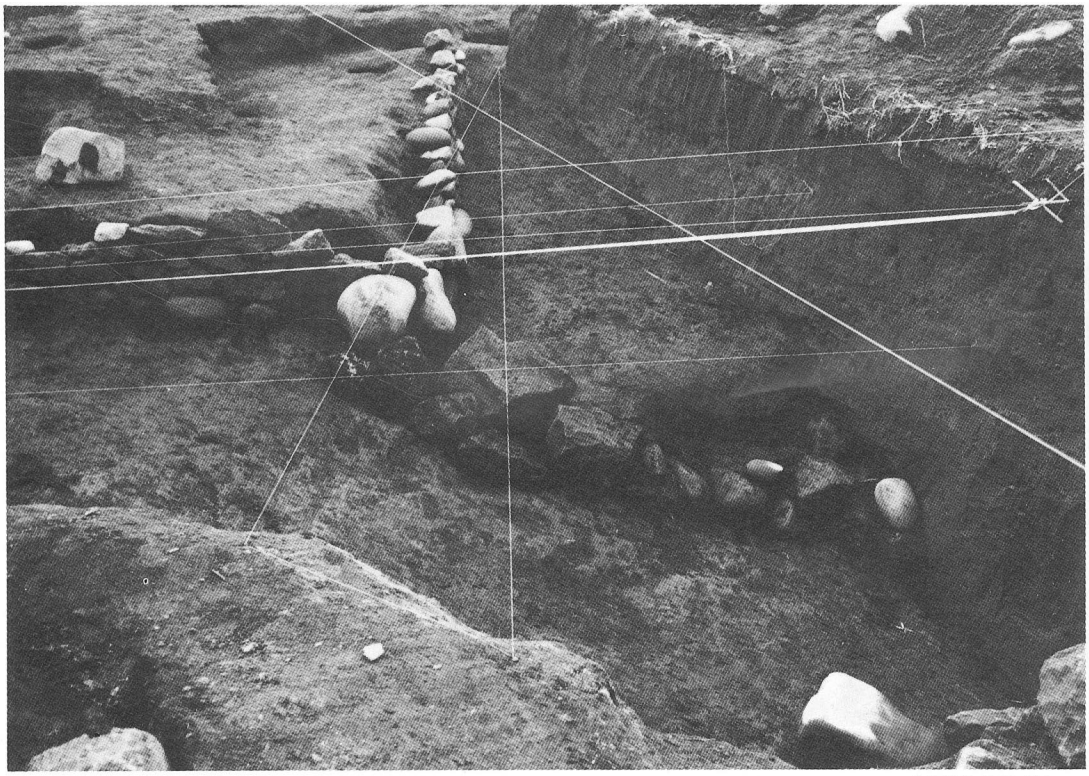
図版6





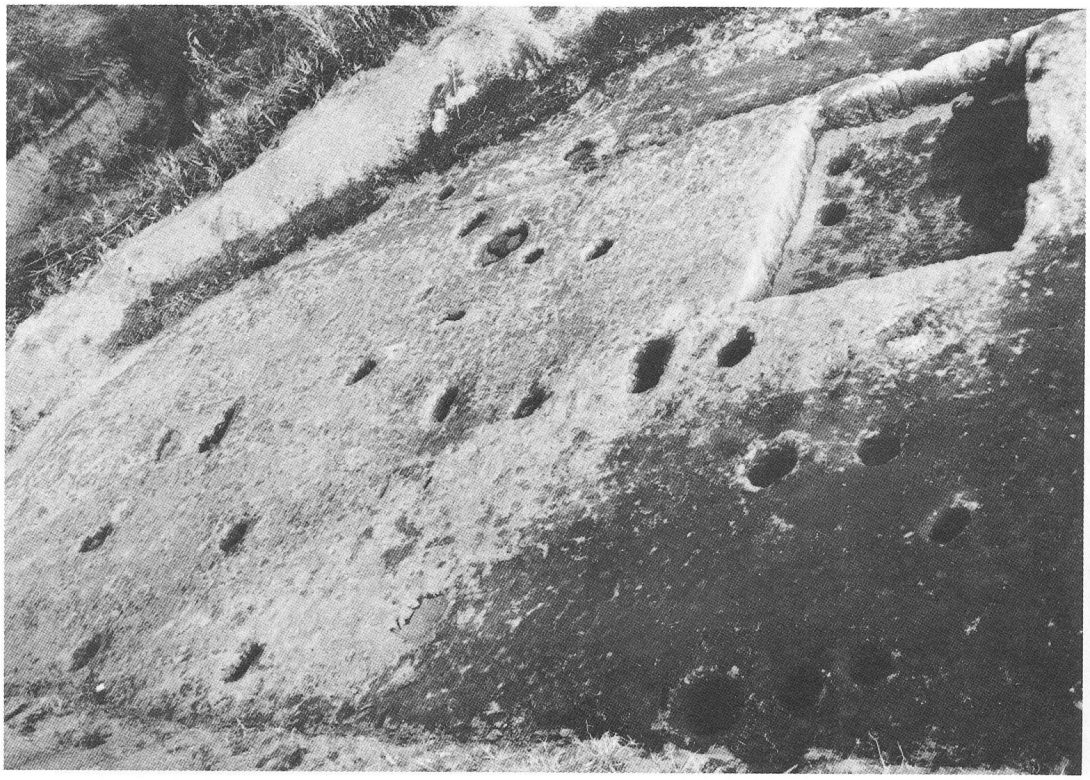
北平場西区石垣

図版7



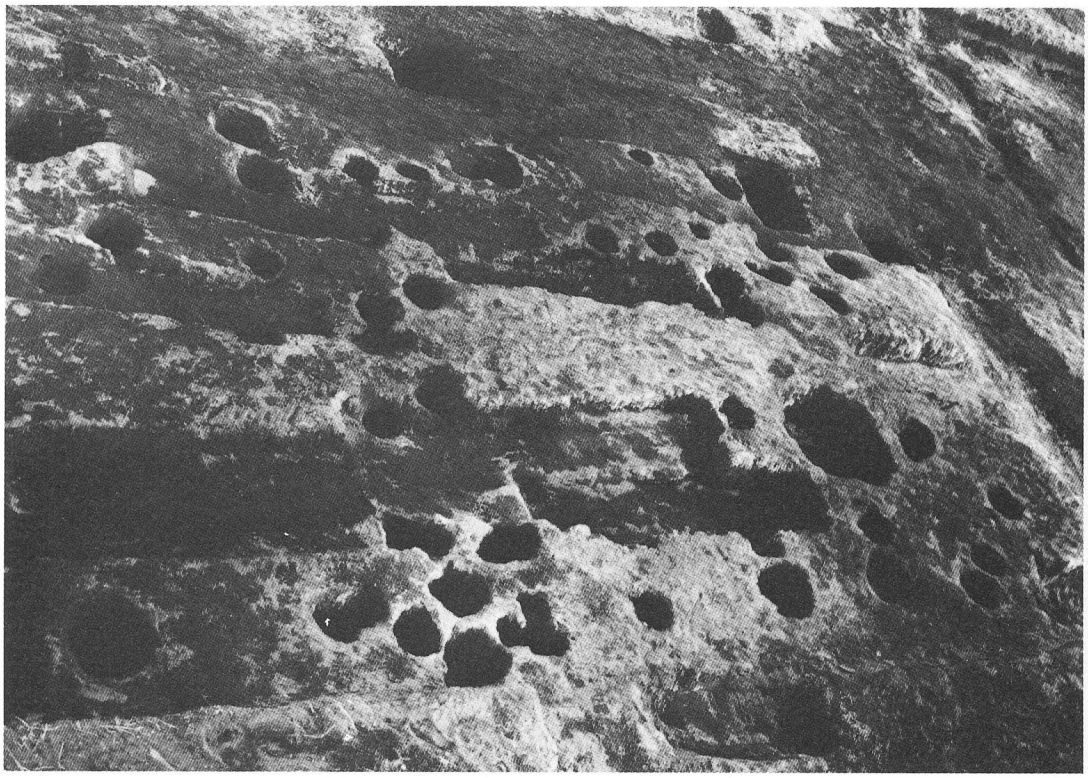
北平場西区石垣

図版8



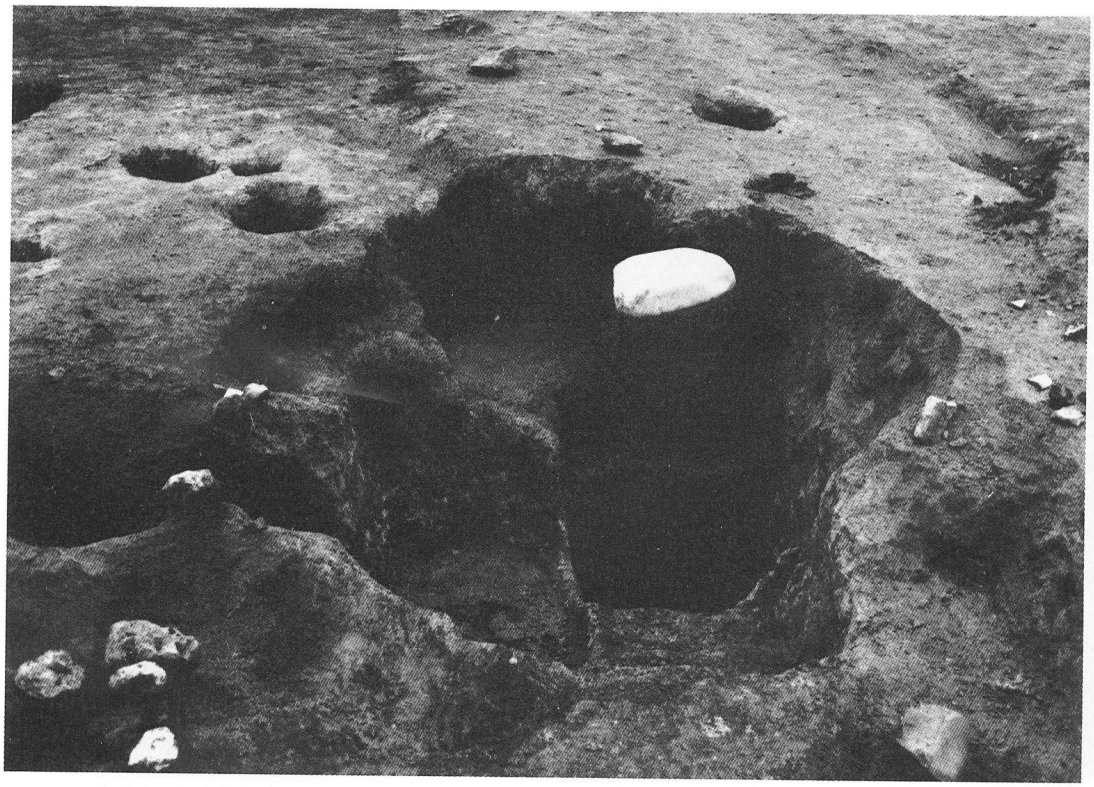
北平場西区高台

図版9



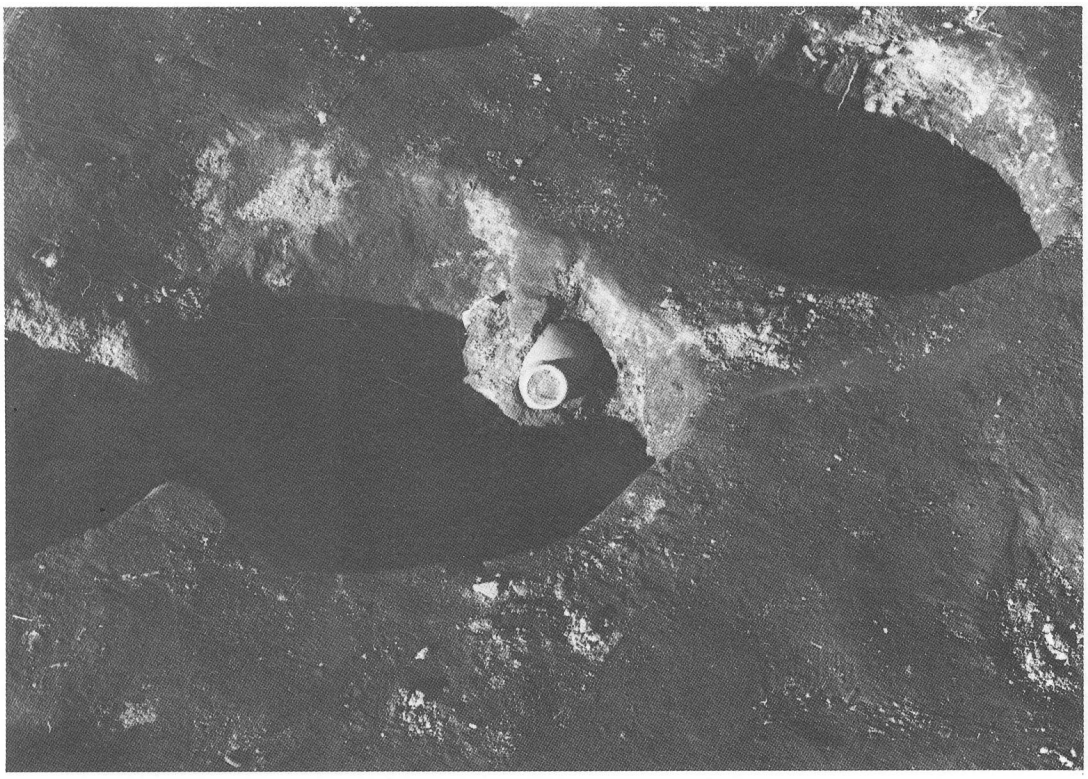
北平場西区高台

(1) 北平場西区ピット群



(2) 北平場西区方形竪穴

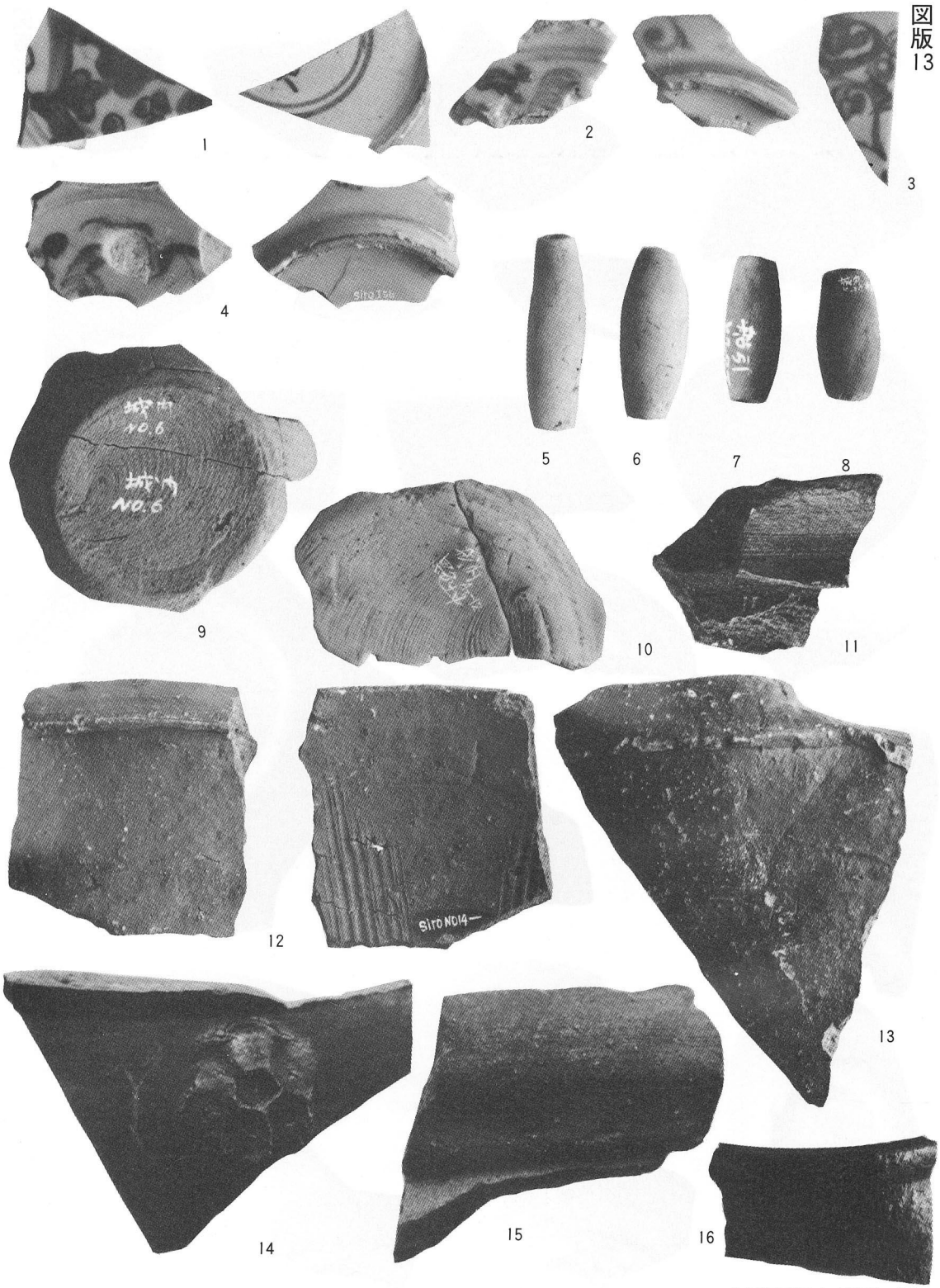
(1) 北平場西区集石状況



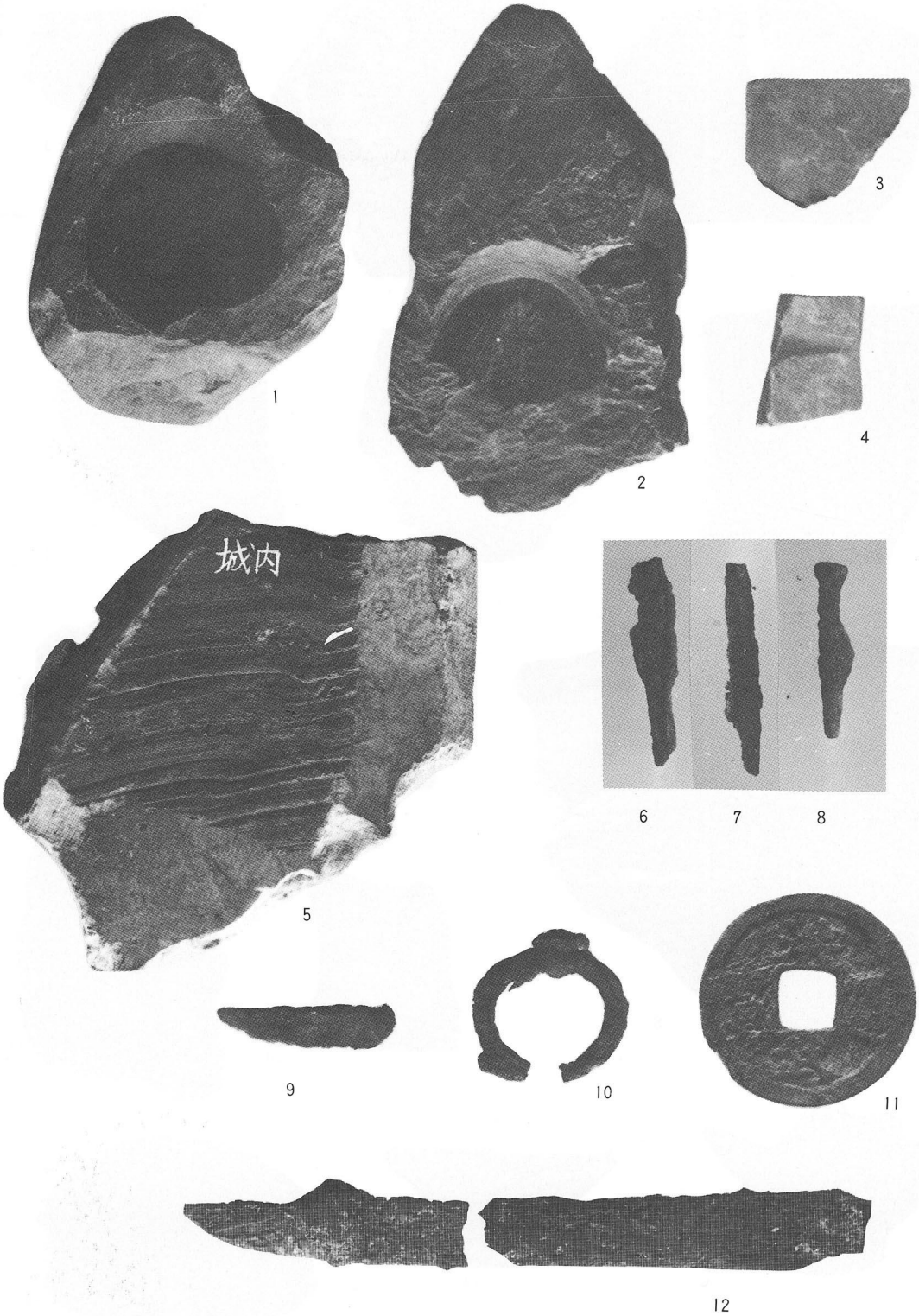
(2) 北平場東区青磁出土状況

北平場西区出土遺物 (1)

図版13

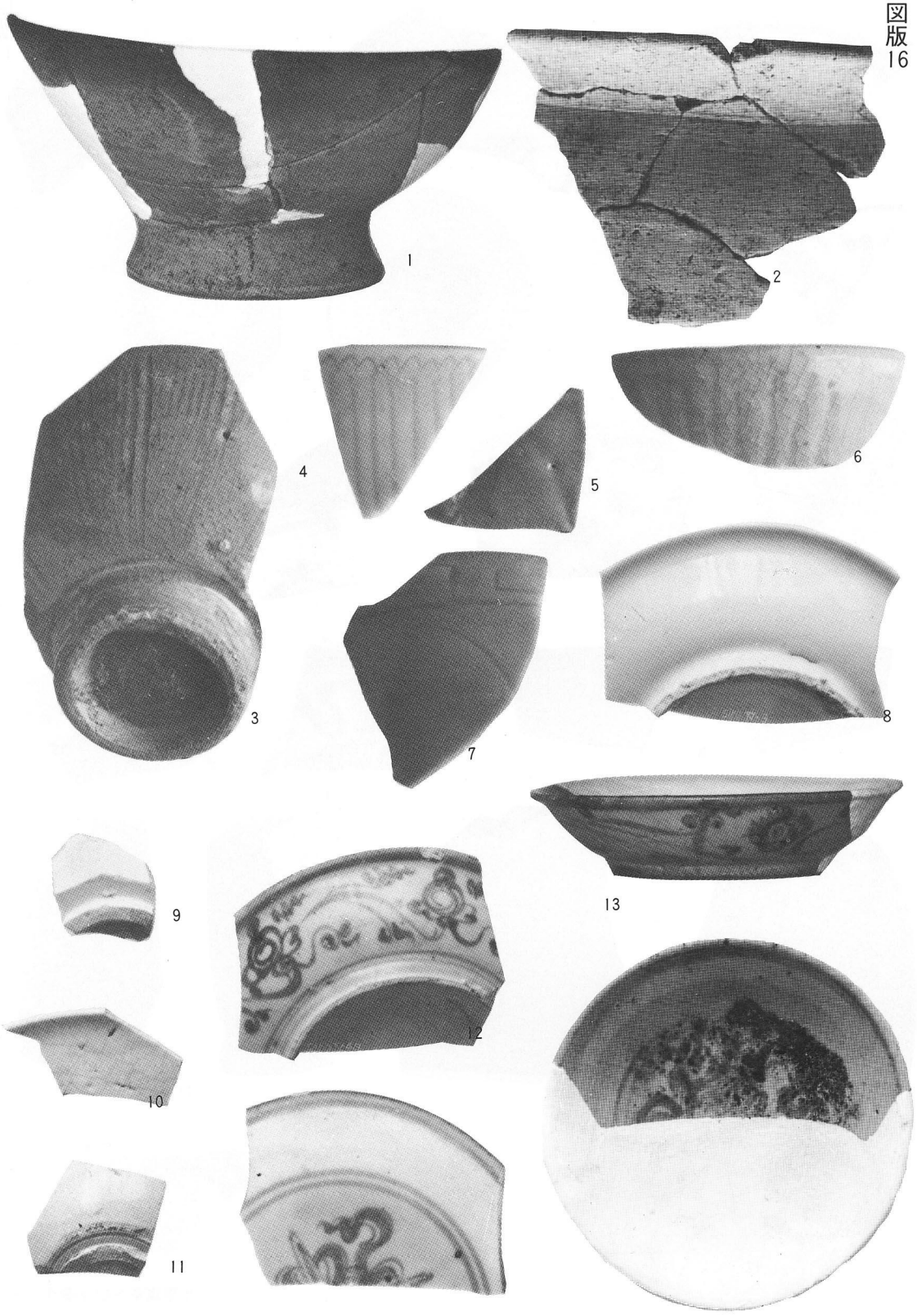


北平場西区出土遺物 (2)

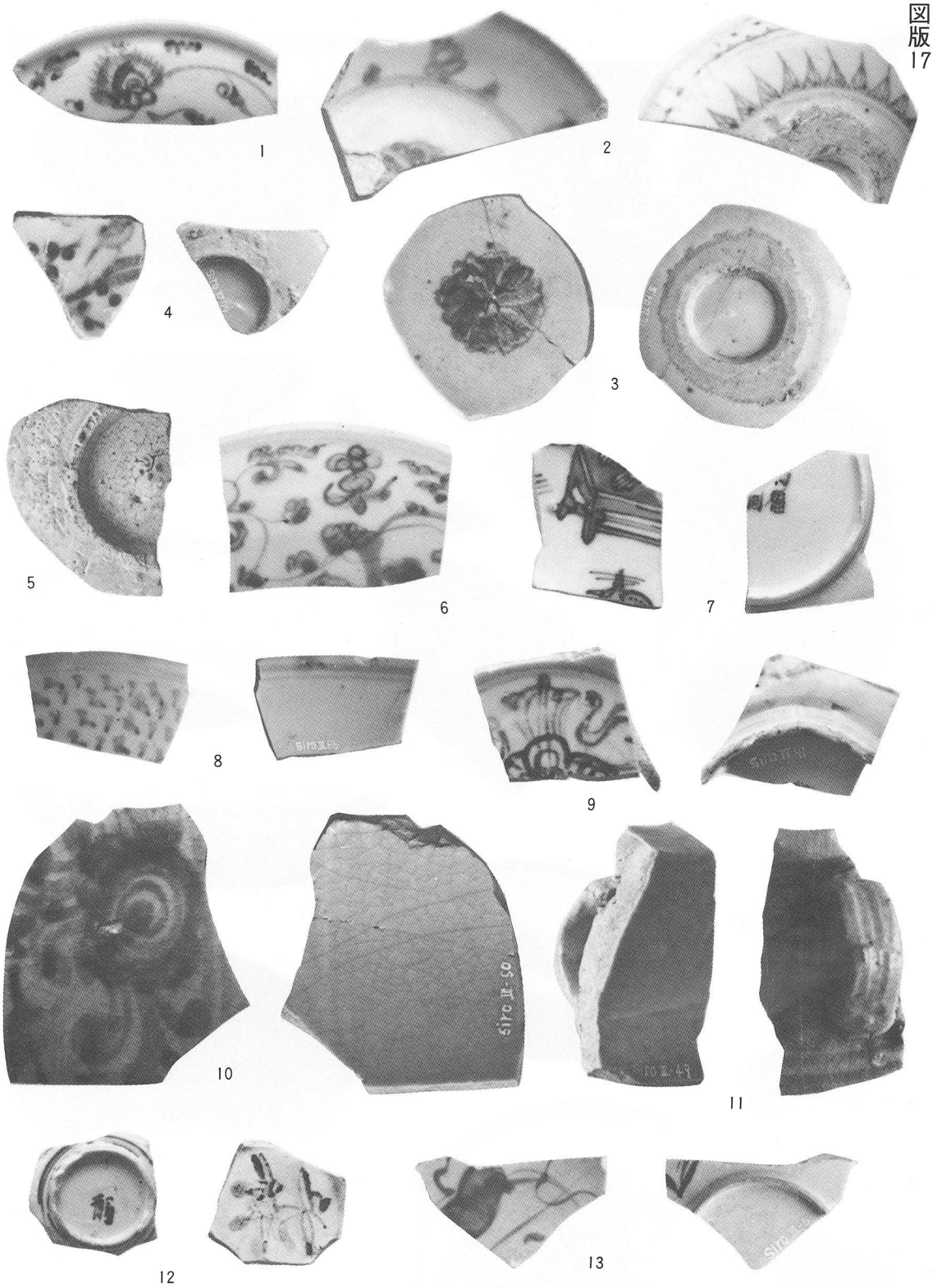


出平場西区出土遺物 (3)

北平場東区出土遺物 (1)

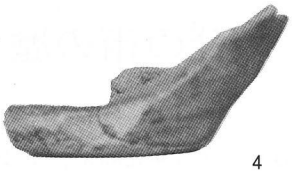


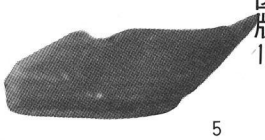
北平場東区出土遺物 (2)

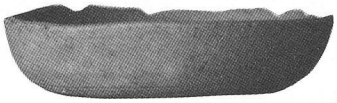


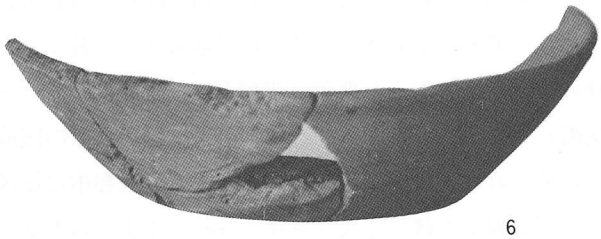
北平場東区出土遺物 (3)

1

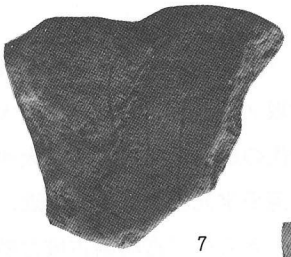

4

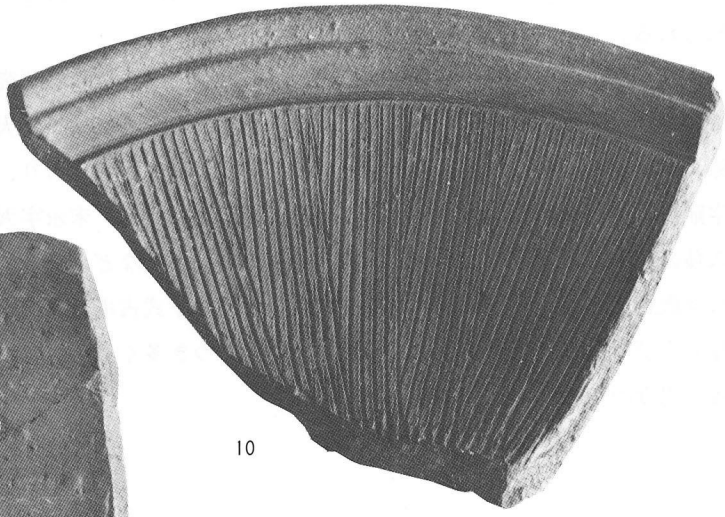

5


2


6

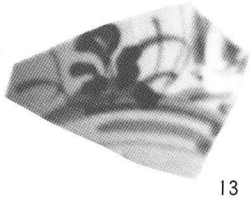
3

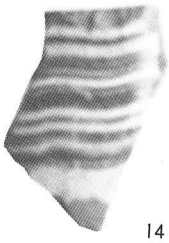

7


10

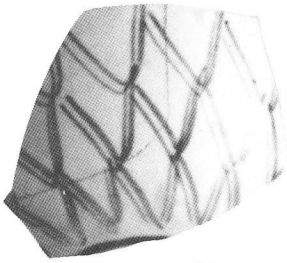
8

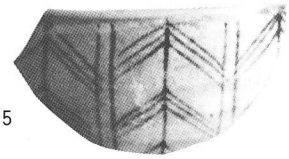
9


13


14

11


12


15

北平場東区出土遺物 (4)

Ⅶ. えびの市の歴史的概観

えびの市は宮崎県の西南隅に位置して南は鹿児島県、北は熊本県に堺している。宮崎県西諸県郡に属したが、昭和41年11月３日に真幸町、加久藤町、飯野町が合併してえびの市となったのである。この地方は古くは眞斫（まさき）と呼ばれ『延喜式』に載する日向国の駅路にある眞斫駅の在った所 で、この駅路は日向国府の在った都萬（西都市）から救貮（くに―国富町）亜椰（あや―綾町）野後（のじり―野尻町）夷守（ひなもり―小林市）眞斫を経て薩摩の国府に通ずる道であったが、さらに遡れば、熊襲征伐に来られた景行天皇が、日向の高屋宮（西都市に伝説地がある）を出て九州を巡幸されるため大淀川の支流岩瀬川を遡って夷守を経て熊県（くまのあがた―玖磨郡）即ち肥後国に越されたと『日本書紀』にある経路である。従ってこの地方は古くから、日向国より薩摩国や肥後国に越す関門であったことが知られる。

しかし学問的にはまだ充分調査されてはいないが、上代日向研究所編の『日向上代遺跡遺物地名表』には縄文時代の遺物を出した土地に飯野の小畑、坂元字二本松、大河平字坂ノ段、加久藤の栗下、大溝原、加久藤（阿高式、轟式）、眞幸の昌明寺などが記るされており、弥生時代の遺跡として飯野の大河平字鍋倉、仲五塚付近、平小場、山内、池島、坂元字広畑、末永字天宮、大河平字元屋敷、京塚付近、加久藤の永山、東長江浦、長江川、眞幸の菅原神社境内などが記されており、さらに『宮崎県古墳台帳』には飯野に円墳５基、地下式古墳13基、眞幸に地下式古墳12基が指定されている。このような状況から見てえびの市は古代の人々が古い時代から住みつき多くの遺跡を残している所であるということができると思うのである。

（石　川　恒太郎）

前　畑　遺　跡

えびの市大字浦前畑

目　　次

1．遺跡をとりまく地質的背景…… 243
(1)　はしがき…… 243
(2)　地形・地質のあらまし…… 243
(3)　遺跡包含層について…… 247
2．位置と環境…… 251
3．調査区の概要…… 251
4．発掘調査の経過…… 253
5．遺　　構…… 258
6．遺　　物…… 258
(1)　土　器…… 258
(2)　石　器…… 263
7．結　　語…… 265

挿　図　目　次

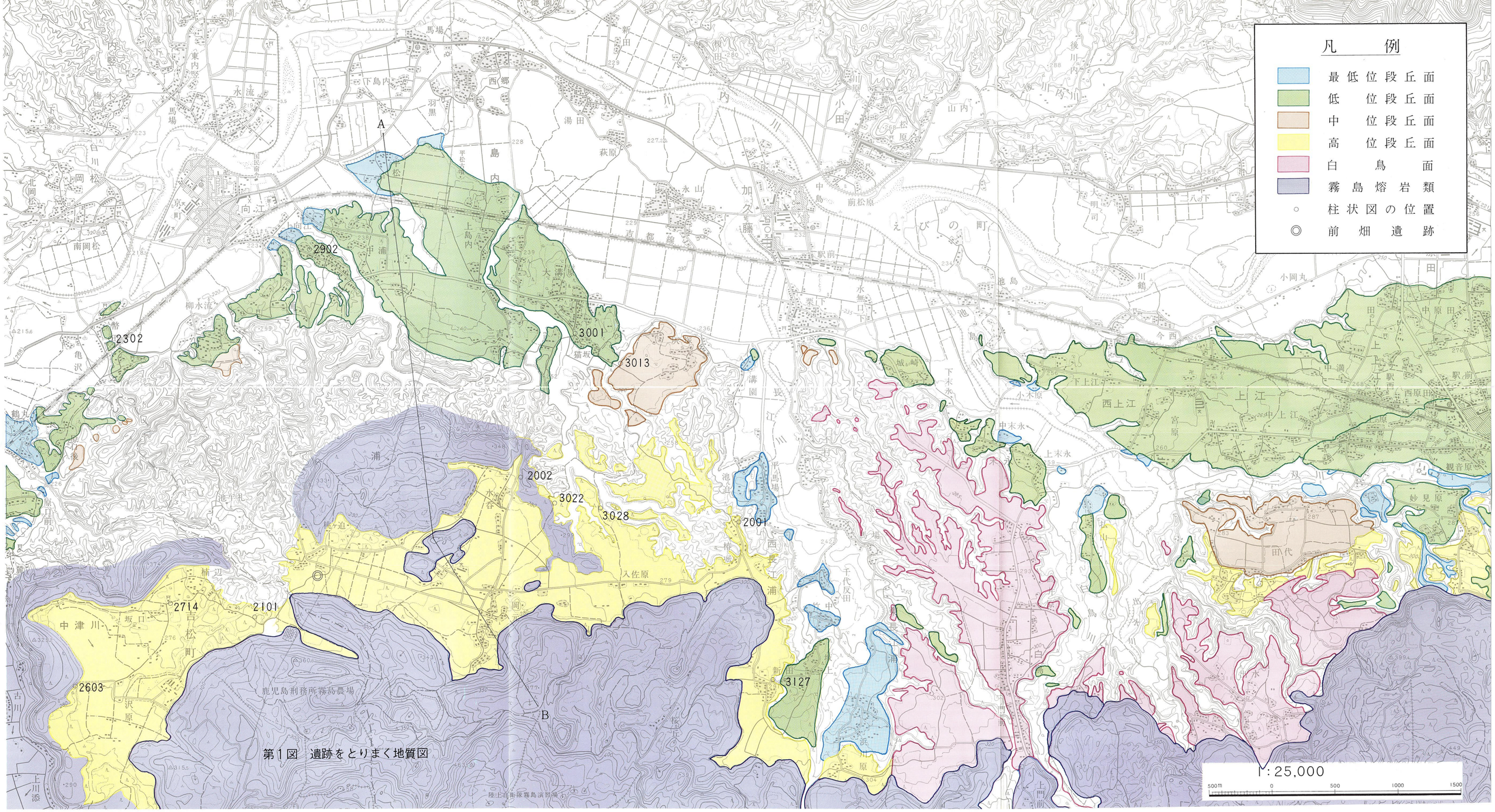
第１図　遺跡をとりまく地質図…… 241
第２図　京町～岡元間地質断面図…… 245
第３図　前畑遺跡の表層断面…… 249
第４図　前畑遺跡周辺の表層断面…… 250
第５図　発掘地区図…… 252
第６図　溝状遺構実測図…… 254
第７図　溝状遺構…… 255
第８図　７トレンチ土層実測図…… 256
第９図　７・８トレンチ土器出土状況…… 257
第10図　土器実測図・拓影(1)…… 259
第11図　土器実測図・拓影(2)…… 260
第12図　土器実測図(3)…… 262
第13図　石鏃及び石匙実測図…… 264

表　目　次

第１表　加久藤層群の層序…… 244
第２表　加久藤盆地の平坦面…… 246

図　版　目　次

図版１　(1)　調査区遠景…… 266
(2)　調査区近景…… 266
図版２　１～３トレンチ溝状遺構…… 267
図版３　(1)「出水式」土器出土状況…… 268
(2)「小池原式」系土器出土状況…… 268
図版４　７トレンチ土層…… 269
図版５　土器　(1)…… 270
図版６　土器　(2)…… 271
図版７　土器　(3)…… 272
図版８　土器　(4)…… 273
図版９　土器　(5)…… 274
図版10　土器　(6)…… 275
図版11　石鏃・石匙…… 276



第1図　遺跡をとりまく地質図

1．前畑遺跡をとりまく地質的背景

(1) はしがき

前畑遺跡は霧島火山の北西端部を占める飯盛山の北麓、宮崎県えびの市眞幸町桃ケ迫にあり、九州縦貫道予定地として、宮崎県文化課による発掘調査が行われた。1979年３月19日から21日にかけて、発掘箇所及び周辺の地質を観察する機会を得たので、その結果を以下に報告する。

該地点は吉都線京町駅の南々東約３km、海抜 280 m の台地上に位置している。この地域の地質にについて記載したものはかなりの数に達するが、特にその細部については、伊田（1951)、伊田・他（1956)、遠藤・他（1969)、太田・沢村（1971)、遠藤（1971)、長谷・他（1972）等によって調査報告が出されており、夫々調査目的乃至対象が異ってはいるが、この地域についての知見は段々と増加して来ている。ここでは、３月19～21日の観察結果を、遠藤・他（1969）及び遠藤（1971）の調査資料に附け加える形で記述しておく。又、この地域の南に隣接する霧島火山については沢村・松井（1957）の報告がある。

(2) 地形・地質のあらまし

飯野・加久藤・真幸の３町からなる「えびの市」は、地形的に見て一つの大きな盆地を作っている。これを加久藤盆地と呼んでおく。中央にある東西15km（飯野町川上ー眞幸町溝ノ口)、南北６km（飯野町苧畑ー同町出水）の凹地を挟んで、北には矢岳から高野にかけて海抜700～800m の高原状高地があり、南には霧島火山があって、甑岳・白鳥山・飯盛山等の山体を並べている。川内川によって貫流されている中央の凹地の底は海抜220～270m で、北側の高原状高地との境は比較的急な斜面であり、南側の霧島火山からは北に向う熔岩流の台地があって、緩やかな火山麓を作っている。中央の凹地は、川内川両岸に発達している氾濫原の他、幾段かの平坦面よりなる。これらの平坦面は、第四紀の後半に存在した古い湖を埋めた堆積物（加久藤層群）の表面が、その後の浸蝕を受けつつも原形が残されているものの他、古い川内川の流路に沿って作られていた扇状地が開析されつつ残っているもの（飯野町原田ー上江、加久藤町大溝原ー眞幸町向江）や河岸段丘等によって構成されている。

この地域の基盤をなすものは中世代乃至第三紀前半の海底堆積物とされている四万十層群で、鉄山川以東の山地を構成している。この四万十層群の上に第三紀後半乃至第四紀初頭の火山噴出物とされている肥薩火山岩類が乗り、主として盆地北側の高原状高地を作っている。その下半部は主として厚い火山砕屑物よりなっており、その上に熔岩流を乗せている。矢岳高原・高野等の緩やかに起伏している高原は、この熔岩流の表面が残されている所である。肥薩火山岩類は盆地の東では八幡ケ岡に続き、西では吉松と栗野の間で川内川を横切り、現在の霧島火山の下にも続いていて、内側に略々円形の凹地を抱いていたのではないかと想像する向きもある。この凹地は加久藤カルデラ（有田・1957）と呼ばれている。肥薩火山岩類の噴出の後、大量の火山砕屑物の流下と堆積が行われた。これは加久藤火砕流と呼ばれているもので、その熔結したものが川内川や鉄山川に沿って分

布し狗留孫峡や万年青平を作る他、大河平から小林市にかけて四万十層群の山地の南側に広く分布している。加久藤カルデラはこの加久藤火砕流の噴出中心が陥没して生じたという考えがあるが、加久藤火砕流は熊本県人吉市周辺から鹿児島県国分市南方にかけて広く分布している。国分市南方のものは萩之元火砕流（沢村・1956）と名附けられているが、宮崎県にもあり、小林市では陰陽石を作り、都城市では関之尾の滝の造瀑層となっている。加久藤火砕流の噴出源が加久藤カルデラ附近に限られるものか、或いは八代海から鹿児島湾奥に続く地構状の凹地に沿ったものか、又、その噴出によって陥没が行われたか、陥没後噴出したかは今の所決めかねる。その噴出時期は太田・沢村（1971）によると第三紀末とされるが、実は第四紀の中頃である。それは、東方の宮崎平野を作る最高位の段丘（遠藤・他、1957、遠藤・1968、1970）の上にこの火砕流堆積物が乗っていることが根拠である（遠藤・1979)。他方フィッション・トラックによる加久藤熔結岩の年代は９万（田口・他、1979）とか６万及び11万年（西村・他、1976）とされている。第四紀中頃の年代としてのこの数値の妥当性の検討は、残された問題であろう。

第１表　加久藤層群の層序
（遠藤・他、1969を一部訂正）上位から

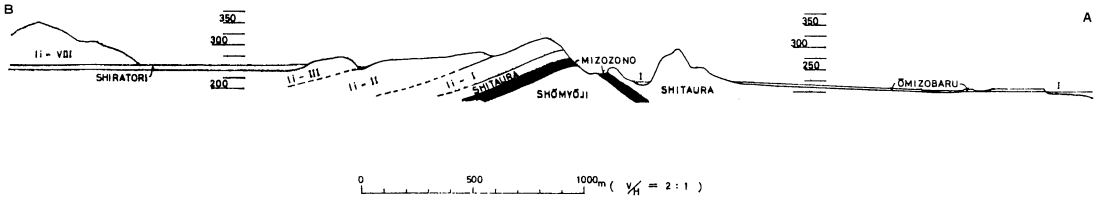
下　浦　層（最厚90 m）	粗粒のガラス質～軽石質ash flow（粒径から言えば畑礫乃至極粗砂）を主とし、中粒のash flow（粒径から言えば含礫中粒砂）を伴う堆積物。一般に葉理が発達する。
侵　蝕	
溝　園　層（最厚30 m）	シルトを主とし、凝灰岩層・スコリア層を伴う。葉理が発達し、同時褶曲構造を示す。昌明寺型ash flow を間に挟み、３層に分かれる所がある。
整　合	
昌明寺層（最厚80 m）	細粒のガラス質ash flow（粒径から言えば細粒砂乃至粗粒のシルト）を主とし、軽石及び粗粒砂を含む。
侵　蝕	
池牟礼層（20m 以上）	シルトを主とし、暗色のash flowを含む。

加久藤層群は加久藤カルデラの範囲に生じた古い湖に堆積したものである。下位より池牟礼・昌明寺・溝園・下浦の４層に分けられ（伊田・他、1951)、地表で見られる岩質・層厚・層序関係は表－１の通りである。加久藤層群の定義とその細分について、荒牧（1968)、長谷・他（1972）は上と異った見解を出している。後者によれば、池牟礼層は加久藤層群から切り離され、加久藤盆地北側の高地下半部を占める厚い火砕岩層や、人吉附近で肥薩火山岩類に履われている人吉層に対応する

ものとされている。又、下浦層はシラス台地を主として構成している入戸軽石流の湖成相であるとされてきた。入戸軽石流は粒径分布からは淘汰不良の含礫中粒砂であり、塊状で、葉理を示さないのが普通である。下浦層は、それに比べ、粒径分布からは稍々淘汰の進んだ細礫乃至極粗粒砂で、屢々葉理を示すことがある。加久藤盆地域では後者のタイプが多いが、前者のタイプが全く無いわけではなく、かなり分布している（遠藤・1969)。ただ、両者の接触している露頭が見られなかったため、筆者自身も、両者は水平方向に移り変るものと解釈していたのであるが、今回、京町から桃ケ迫に至る道路の西側、下浦地区南方約 600m にあるシラス採取場で、両者が接触している露頭を発見した。そこでは下位の入戸型軽石流（入戸シラスと呼ぶ）を切って下浦型の粗粒のash flow（下浦シラスと呼ぶ）が乗っており、その境はかなり（露頭面で上・下の差数m）の凹凸を示していた。従って、いわゆる下浦層は、間に侵蝕期を挟んで下位の入戸型軽石流と、上位の下浦型軽石流の2部分に区分し得る可能性がある。

加久藤層群は加久藤盆地内全域に亘り略々水平に分布し、その上に平坦な段丘面を残存しているが、京町と桃ケ迫の間、三吉から鹿児島県吉松町原口～麓に至る地域では、北西に凸傾を向けた弧状の軸をもつ緩い褶曲構造が作られ、緩やかな背斜・向斜を繰り返している。そのため、水平な地層の地域の特徴であった平坦面を保存する台地地形が破壊され、起伏の多い屋根と谷が作られている。その際向斜の軸部ではホグバックが、褶曲の翼部ではケスタが、地形的特徴となっている（遠藤・他、1969、遠藤・1971及び第2図)。

加久藤盆地の盆地底を構成する平坦面及びそれを特徴づける地層は表－2の様に区分できる。一般的に言えば若い面程川寄りに、古い面程山側に分布する傾向がある。0と1、4と5の面は略々近いもので、0・1は沖積面に、2以上は洪積段丘乃至台地と呼ばれるものに属する。5の面は入戸シラスの堆積（1.6万～2.6万年前）直後のものと見做される。0・2・4・5の面は分布が広く連続性に富んでいる。2・4・5のあるものは開析扇状地の性質を示している。1・3は分布が狭く、連続性がよくない。



第2図　京町－岡元間地質断面図

li －Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ…飯盛山熔岩　　Ⅰ… 氾濫原面

先に記したように、前畑遺跡は海抜約 280 m の台地上に乗っているが、この台地面は、加久藤盆地を構成する平坦面のうち高位段丘面に当るものである。この面は西方には吉松町楠辺から沢原に続き、東方には桃ケ迫・水呑・岡元・入佐原・椿掘・新田・浜川原と続いている。入佐原・椿掘の北方にこの面に当るものが断続的に残っている。高位段丘面と白鳥面は、高度・平坦度・輪郭が類似しているので、前2報（遠藤・他、1969、遠藤・1971）では区別していなかったが、浜川原の東

で比高約10m の急斜面で境されているので、本報では区別しておく。類似するものの、第２表に記した違いの他、高位段丘面では白鳥層が発達していない。

京町は氾濫原面上に位置しているが、南東に最低位段丘が僅かに見られ、下浦型シラスを切って、厚さ２m 以下の砂・泥が乗っている。下浦には低位段丘面が稍々広く分布するが、これは大溝原・三吉から西に広がる開析扇状地の続きである。下浦では砂～ラミナの発達した泥が薄く乗っている。下浦から南は、加久藤層群が褶曲している所で、平坦面は発達していない。

桃ケ迫の高位段丘面の南側には飯盛山から北流した何枚かの熔岩流が積み重なって、一種の段丘地形を呈している。このような熔岩段丘では普通の段丘と違って、高位程新しい熔岩流である。異った熔岩流又は同一熔岩流の異った分岐の接触部には凹地が生じている。桃ケ迫の台地の北側には333～348に続く丘が北西に凸面を向けた弧を画き、同様の丘は岡元小学校の北西側や水呑地区の東側に断続して見られる他、楠辺の西方にも上川添にかけて続いている。この丘の成因に関して、桃ケ迫一岡元に且てあった火口壁の埋め残りという見解もある（長谷・他、1972）が、第３図の桃ケ迫から浦を経て水呑まで谷が続き、浦に凹部が見られること等、先に述べた異った熔岩流の境界に類似している。北方には加久藤層群の背斜軸が平行して弧を画いており、この部分で加久藤層群は南に傾き、丘の断面は北側に急斜面を向け、南東に緩く傾く背面を持ったケスタ地形が生じている。桃ケ迫一水呑北方で２重の、岡元小学校背後を加えると３重のケスタと見なせよう。地層の傾きを水平に戻すと南から北への熔岩流が３枚積み重なった状態になるであろう（第２図）。

第２表　加久藤盆地の平坦面（若いものから）

０．氾濫原面	川内川及びその支流の両側にある最低位の面。いわゆる氾濫原である。飯野川上で海抜270ｍ、吉松で220ｍ。恐らく、そう厚くない（厚さ10m 程度以下？）と推定される河成の礫・砂・泥からなると思われるが、資料を持たない。
１．最低位段丘面	最低位の段丘面。沖積面との比高５m 前後。構成層についての資料は少ないが、薄い（５m 程度以下）の礫層を主とし、砂・泥を伴うものと推定される。
２．低位段丘面	飯野駅附近及び五日市附近を扇頂とする旧い扇状地（飯野開析扇状地）や大溝原の開析扇状地の他、河岸段丘として川内川の北と南に見られる。比高５m 前後の崖を境として２～３段の面に細分される。沖積面との比高は最高位のもので15m 程度。厚さ５m 程度の漂礫礫層から主として構成され、砂・泥を伴う。
３．中位段丘面	田代・栗下・灰塚・柳水流・吉松町原口等に点在する段丘面。沖積面との比高20～25m。構成層は厚さ５m 程度の漂礫礫層から主として構成される。点在するので、細分されるか否かは不明。
４．高位段丘面	沖積面との比高30m を超える面。東方で海抜300ｍ（妙見原の南・小林市平小場）、西方で海抜280ｍ（桃ケ迫）。その表面は略々水平に近い。面の開析度は次の白鳥面に近いが、平面形で輪郭の屈曲が稍々劣り、表面の平坦さで稍々優っている。構成層は、次の白鳥層以後の漂礫～中礫（Pebble）礫層乃至砂層を主とし、泥層を挟むことがある。
５．白鳥面	この地域で最高位の面。海抜300ｍ乃至330ｍ、沖積面との比高50m に達する。下浦層又は溝園層を切って乗る厚さ10m 前後以下の砂層乃至礫層を伴っている。これを白鳥層と呼ぶ（伊田・他1956）。白鳥層の特徴は、スコリア・火山礫・火山砂を含む事、クロス・ラミネーションが発達することである。

以上を総括すれば以下のようになるであろう。

中生代から第三紀前半にかけ加久藤盆地の地域を覆っていた四万十の海は、第三紀中頃以後はるか東方、宮崎平野の地域まで退き、代って八代海から鹿児島にかけ、内陸凹地的な環境が支配的となった。この内陸凹地には湖水的環境が作られ湖成層が堆積すると共に、全面的に火山活動が盛となり、第三紀後半から第四紀始めにかけて大量の火山砕屑物が噴出堆積し、続いて熔岩が平たく流出した。このような火山噴出物の一部が加久藤カルデラの現在の北壁を作っている。この熔岩流出後それ程間をおかず、上記の凹地に沿った加久藤火砕流の噴出流下堆積があった。加久藤火砕流の時代は第四紀中頃である。第四紀後半以後、加久藤盆地の地域には湖盆が作られ、泥層を堆積すると共に、昌明寺型・入戸型・下浦型シラス層が何回となく流入堆積し、湖盆を埋積した。この湖盆の埋積完了以前、洪積世の末期から霧島火山の活動が始まり、下浦層に埋積された湖盆底に、南の霧島火山からスコリア及び火山礫が供給され、下浦層を覆う白鳥層が形成され、現在の加久藤盆地底の平坦面中最高位の面である白鳥面の原形を作った。その後下刻によって第２表のような段丘面を残しつつ現在に到った。加久藤層群は一般に水平で台地地形を保存しているが、京町南方地区では、恐らく活動的な地下構造を反映して、緩やかな背斜・向斜を繰り返し、台地地形が破壊され、ケスタ・ホグバック地形を特徴的に示している。段丘形成期から現在にかけても周辺における火山活動が引き続き、現在の霧島火山が作られると共に、段丘面上に降下火山砕屑物を堆積させた。これを日向ローム層と呼んでいる（伊田、1948)。

(3) 遺跡包含層について

前畑遺跡発掘地点における最も深い壁が見られるグリッドⅧ－Ａでの断面を図－２に示す。図－２には火山灰層の性質、土色（標準土色帖による)、土壌硬度計による３回の測定値とその平均を並記してある。左には識別するための略称（符丁）を記してある。第一オレンジ層は俗にアカホヤと呼ばれているものであるが、類似するものが何枚かあるために序数を附けている。色が湿っている時褐橙色でかなり水を含み粘着性を示すが、乾くと黄橙色カルメ焼き状となり、指先でつぶすと「キナコ」のような感じがする。第一オレンジ層の基底数cmの部分は粒が粗く、軽石粒及びピソライト（火山豆石）を含んでいる。以上がこの層の識別点である。第一オレンジの年代は、6,400±110、6,290±120、6,050±110年前と言われている（宇井・福山、1972)。その他の層位の年代については、現在の所資料を持っていない。

第一オレンジの下の火山灰層は、幾らか粘稠性を持ち、下位のもの程著しくなる傾向を示す。何枚かの黒色帯があり、軽石やスコリアを点在する層位がある。黒色帯の中に第一オレンジに酷似したガラス質火山灰のレンズを含む。これを「偽アカホヤ」又は「Ⅰ－Ⅱオレンジ」と呼ぶ（遠藤・他、1969)。地表から200 cm以下は、恐らく高位段丘面に伴う堆積層である。

第４図に遺跡周辺の幾つかの地点で観察した断面を示してある。図の下段は高段位面上の地点で、右端に小林市出の山の断面を比較のため示してある。上段の四日市原だけは中位段丘、他は低位段丘である。

高位段丘の特徴は水呑以東に見られるスコリア層である。椿堀・新田でスコリア層の下位には高位段丘を構成する薄い泥層を挟む砂層～粗粒砂層が溝園層の上に乗っている。椿堀ではスコリア層の上にも葉理の発達した粗粒砂層～小礫層があり、見掛け上白鳥層に似ているので前報ではこの面を白鳥面とした。降下火山灰層は分布の末端部でレンズ状になるので、水呑が略々スコリア層の分布の北限に近いことになろう。そのことから前報では、このスコリアの噴出源を飯盛山と考えたが、その他に根拠はない。椿堀の西（3028）でスコリアの下にガラス質・鉱物質・軽石質火山灰層がある。宮崎平野で第二オレンジ（遠藤・他、1962、遠藤、1963）と呼んでいるものに似ている。第二オレンジは入戸シラスを切る砂礫層（時期的には白鳥層に当る）の上に乗っているもので、色調は第一オレンジに比較して稍々淡く、汚濁して見え、粒度は稍々粗く、乾くと鋸屑状を呈する。軽石粒を全体に互って含み、第一オレンジのように基底部だけに集中はしていない。この地域西端の古川での最下部に見られるものもこれに当る。とすれば、第二オレンジが高位段丘面の指標火山灰層と言える。前記スコリア層の上位に薄いスコリア層を挟む層位がある（新田)。このスコリアは場所によっては、暗色のローム又は砂層中に散在して含まれていることもある（出の山、3028、水呑ａ、前畑遺跡ｃ)。この薄いスコリアの上に、新田から西では、ガラス質火山灰層があり、時には厚く（新田、椿堀)、時にはレンズ状に（出の山、3028、3022、前畑遺跡Ａ・Ｃ・Ｄ）なりながら断続する。これが先に記した「偽アカホヤ」である。

出の山では「偽アカホヤ」と前記薄いスコリアとの間に著しい降下軽石層を挟んでいる。これが小林浮石と呼ばれている（伊田・他、1956）が、この地域の高位段丘上では明らかなものはなく、僅かに、水呑ｂで第一オレンジの下位に２枚の軽石層が見られ、又、西端古川でローム中に軽石が点在している層位がある。第一オレンジの下位にも何枚かの暗色帯があるが、各断面での対応関係はつけられない。

中位乃至低位段丘での特徴は、厚さ５ｍ程度以下の大礫礫層や泥と交互する砂又は暗色帯を薄く挟む泥で構成されており、砂や泥がシラス層から洗い出されたもの（二次シラス）からなることと、その間又は上に、軽石層又は第二オレンジによく似たガラス質、鉱物質、軽石質火山灰層を伴うことである。これは層位的には小林浮石に大体対応する位置にあるが、「偽アカホヤ」やスコリア層を見ていないので断定はできない。中～低位の段丘は更に細分され得るので、広範囲に亙る資料を精細に対比すれば、各面を特徴づける火山灰が見つかるかも知れない。　　（遠　藤　　尚）

参考文献

有田忠雄（1957）：加久藤カルデラの提唱（演旨)、地質学雑誌、63巻、742号。

荒牧重雄（1968）：加久藤盆地の地質―えびの、吉松地域の地震に関連して―、地震研究所彙報、46巻。

伊田一善（1948）：南九州の天然ガスと地質について、石油技術協会誌、Vol．13、No.4。

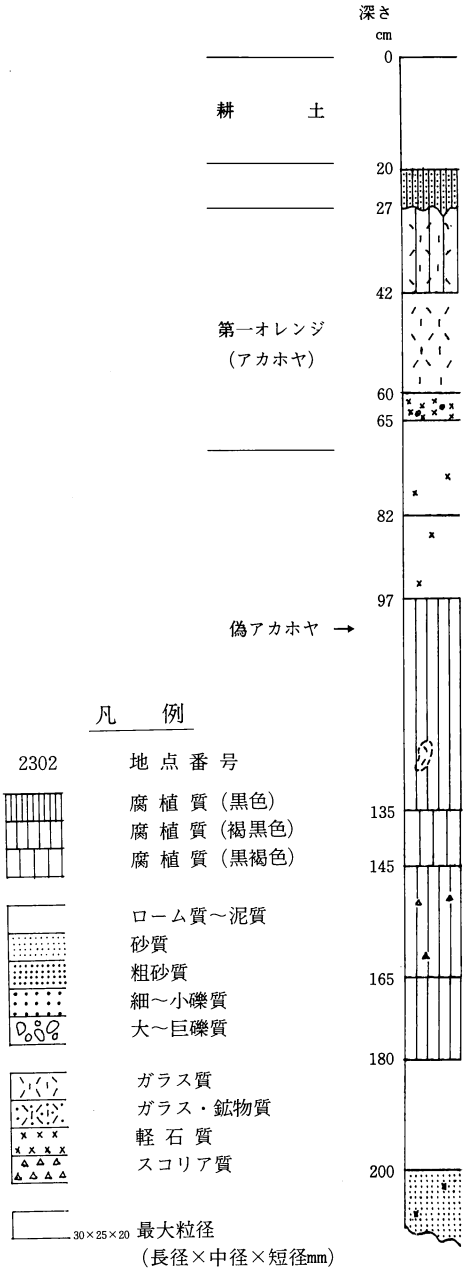
――――（1951）：宮崎県加久藤天然ガス地質調査報告、地質調査所月報、Vol．2、No.3。

――――・本島公司・安国昇（1956）：宮崎県小林市附近天然ガス調査報告、地質調査所報告、168号。

一色直記・小野晃司・平山次郎・太田良平（1965）：放射性炭素^{14}Ｃによる年代測定、地質ニュース、133号。

宇井忠英・福山博之（1972）：幸屋火砕流堆積物の^{14}Ｃ年代と南九州諸火山の活動期間、地質学雑誌、78巻、11号。

遠藤尚・宮脇繁・大崎純二・木原貞雄（1957)：宮崎県中部及び南西部の段丘について、宮崎大学学芸学部時報、1巻、3号。



土色	硬度 ( ):平均
7.5YR 2/2	16・18・18(17)
7.5YR 2/1	17・18・18(18)
7.5YR 4/6	18・19・20(19)
7.5YR 6/8	21・23・24(23)
7.5YR 6/8	23・23・24(23)
7.5YR 5/6	18・20・20(19)
7.5YR 4/4	22・24・24(23)
7.5YR 3/3 ←7.5YR6/8	18・19・20(19)
7.5YR 4/3	20・20・21(20)
7.5YR 3/2	26・27・28(27)
7.5YR 3/2	20・21・22(21)
10YR 6/8	11・13・14(13)
10YR 7/3	

黒色・砂質

帯黒・褐橙色、ガラス質・砂質

褐橙色・ガラス質・砂

黄橙色軽石・ピソライト(径10mm)

暗黄土色・ローム
含軽石

暗帯褐黄土色、ローム・稍粘
含軽石

帯黒・褐色、ローム・稍粘

暗褐色、ローム・稍粘

帯灰褐・黒色、ローム、粘
含スコリア

灰黒色、粘土質

淡黄土色、粘土

淡黄土色、含軽石、砂・稍粘

凡例

2302　地点番号

腐植質(黒色)
腐植質(褐黒色)
腐植質(黒褐色)

ローム質～泥質
砂質
粗砂質
細～小礫質
大～巨礫質

ガラス質
ガラス・鉱物質
軽石質
スコリア質

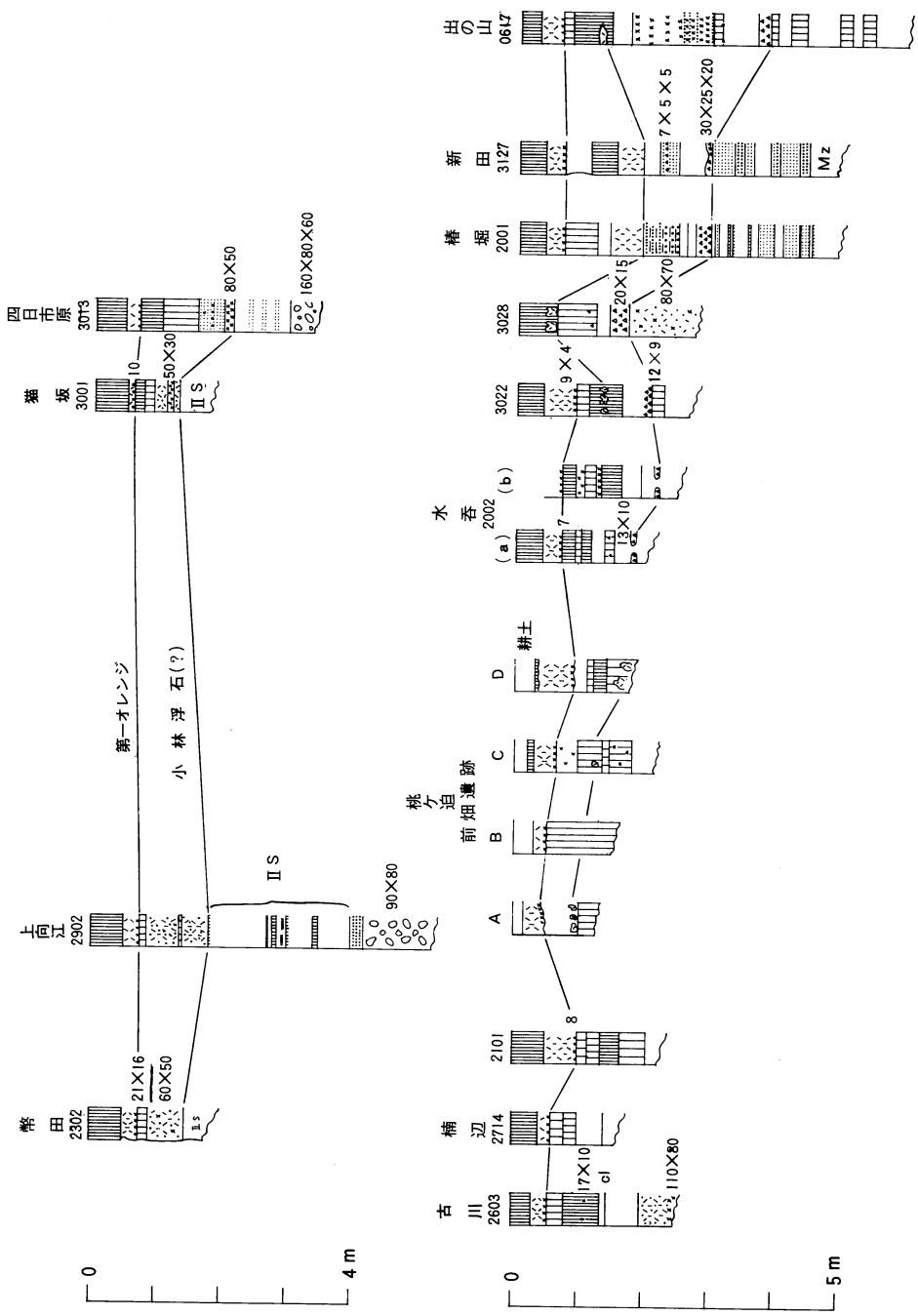
30×25×20　最大粒径
(長径×中径×短径mm)

SII　二次堆積シラス

M2　溝園泥層

Cl　粘土

第3図　前畑遺跡の表層断面



番号は平面図と同じ。記号は第3図と同じ。
前畑遺跡の断面のグリッド番号　水呑のaとbは略々同地点aが北、bが南。
A：XI－H
B：X－S
C：VIII－A
D：VIII－F

第4図　前畑遺跡周辺の表層断面

遠藤尚・杉田剛・法元紘一・児玉三郎（1962）：日向海岸平野を構成する段丘について、宮崎大学学芸学部紀要、14号、自然科学編。
――――（1963）：宮崎県中部の段丘を覆う火山灰層の層序学的研究、同上、15～16号、自然科学編。
――――（1968）：宮崎平野の地質学的研究（英文）、宮崎大学教育学部紀要、24号、自然科学編。
――・小林ローム研究グループ（1969）：火山灰層による霧島熔岩類の編年（試論）、霧島山総合調査報告書、宮崎県。
――――（1970）：宮崎平野の諸問題、第四紀、№15。
――――（1971）：シラス地帯における斜面崩壊の集中的発生について―台地破壊系列の提唱―、松下久道教授記念論文集。
――――（1979）：宮崎県の平坦面に乗る火山灰層の或るものについて（要旨）、日本地質学会西日本支部会報、№68
太田良平・沢村孝之助（1971）：えびの・吉松地区地震震源域付近の地質、防災科学技術総合研究報告、26号。
沢村孝之助（1956）：５万分の１地質図幅及び同説明書、「国分」地質調査所。
田口幸洋・岡口雅子・林正雄・山崎達雄（1979）：霧島地熱帯および周辺の火成岩類のフィッショントラック年代（要旨）、日本地質学会西日本支部会報、№68。
長谷義隆・千藤忠昌・今西茂（1972）：宮崎県加久藤盆地およびその周辺の新生界―その層序と地質構造―、熊本大学理学部研究報告、２号
西村進・宮地六美（1973）：南九州火砕流のFission-track年代、岩石鉱物鉱床学会誌、68巻。
――・――――（1973）：同上、(2)、同上、71巻
――・松井和典（1957）：５万分の１地質図幅及び同説明書、「霧島山」、地質調査所。

2．位置と環境

えびの市京町の南方約２kmの鹿児島との県境に近い、標高280～300ｍに位置する遺跡である。なだらかに南面する傾斜地には、表面採集において多くの縄文土器片、石鏃、石匙などが認められた。

遺跡は西方、南方を杉山に囲まれ、東方に向かっては盆地状に水田地帯が広がる場所に位置している。北西の方向約２kmの所には灰塚遺跡(注１)があり、また岡元の周辺には、発掘期間中地元の人の案内で確認することの出来た土師器を出土する場所がある。

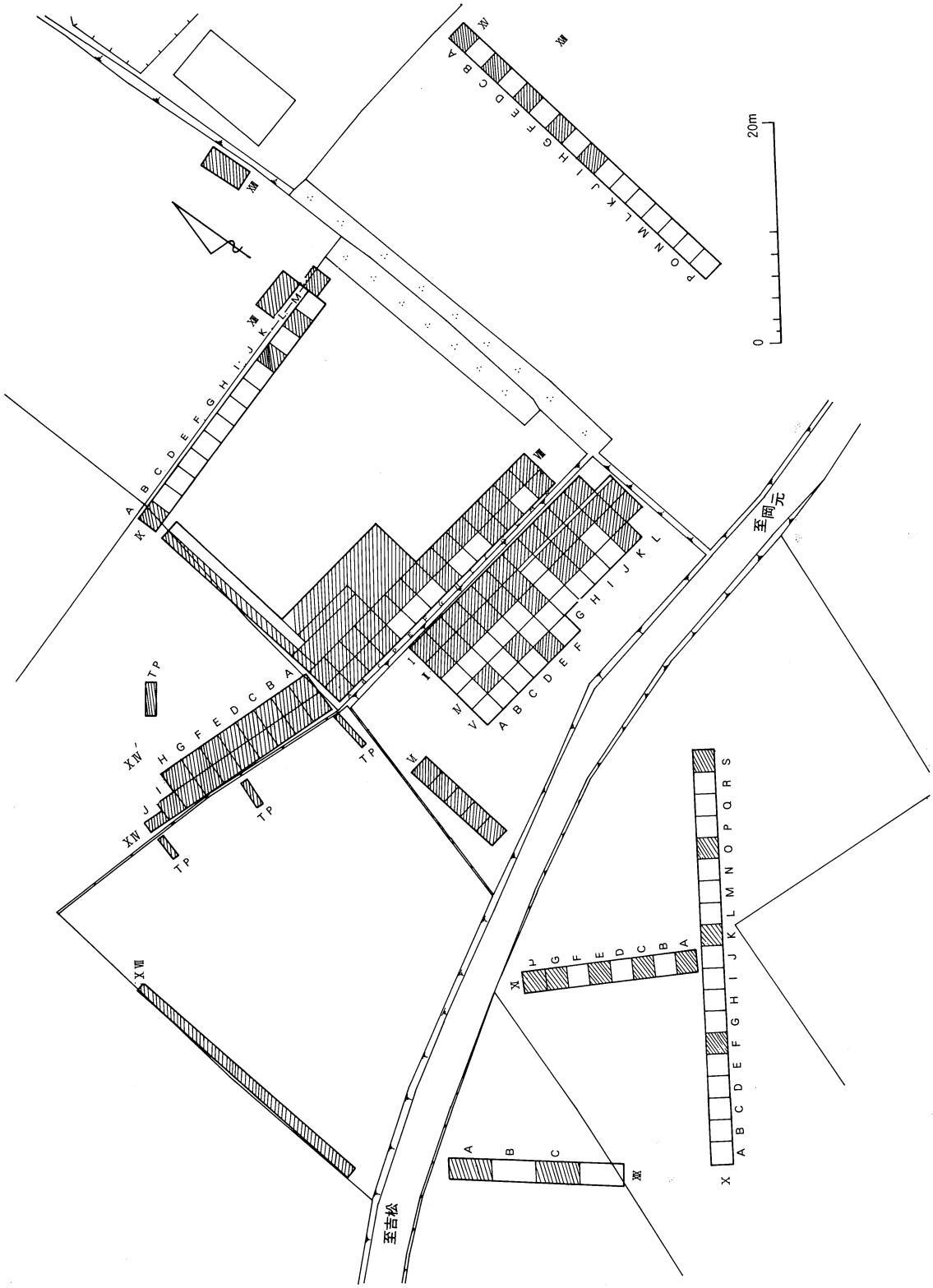
3．調査区の概要

道路をはさんで南側のゆるい傾斜地には、表面採集の段階において、かなりの土器片・石器類の散布がみられたが、表面には既に赤ホヤの露出がみられ、包含層の残存の可能性は薄かった。従って、比較的地層攪乱の薄いとみられた。道路の北側に、まずトレンチを設定した。

しかし、第８図の土層図にみられるようにⅥ層の赤ホヤに至るまで、遺物を包含するⅢ・Ⅳ・Ⅴ層はいずれも薄く、また多くは攪乱を受けていた。

XⅣ・XⅣ′トレンチにおいては、赤ホヤ層の下まで掘り下げ、前期土器の出土をみたが、さほどの拡がりは得られなかった。Ⅶ・Ⅷトレンチおよびその拡張区においては、比較的まとまりのある状態で縄文後期土器の出土をみたが、遺構の検出は出来なかった。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲトレンチにおいては、近世の陶磁器片を混入した状態で溝状の遺構が確認された。

本遺跡調査区内において特記すべきことは、以上の３点にすぎない。



第5図　発掘地区図

4．発掘調査の経過

発掘調査は昭和54年２月22日から同年３月22日までの25日間にわたって実施した。以下、発掘調査日誌よりその概要を記す。

２月22日　２×20ｍのトレンチを設定し、１グリッドを２×２ｍに組む。石匙及び縄文土器片の出土をみる。

２月23日　前日に引き続き掘り下げ作業。

２月24日　22日に設定したⅠトレンチの南側にⅤトレンチまでを設定し、又その西側にⅥトレンチを設定する。現表面下15cm程で、いずれも赤ホヤが露出し、すでに赤ホヤ上の縄文中期以降の包含層が削除されていることを確認。石匙１点出土の外、特に特記すべき出土遺物はない。

２月26日　Ⅱトレンチにおいて土色の変化を認める。全体像確認のためⅢトレンチの方まで拡げる。

２月27日　昨日の土色の変化はほぼ東西に延びている。まだその性格は明らかではない。新たにⅦ・Ⅷトレンチを Ⅰトレンチの北側に設定。

２月28日　土色変化の部分の掘り下げ。溝状の形状を示す。

３月１日　Ⅶトレンチにて縄文土器出土。Ⅷトレンチに及び拡張発掘。道路をはさむ畑地にⅩトレンチを設定。表土下15cm内外で赤ホヤに行きあたる。

３月２日　Ⅹトレンチに直行する位置でⅪトレンチを設定。

３月３日　Ⅶトレンチの西方にⅩⅣトレンチを設定。縄文土器片外黒曜石核を出土。

３月５日　昨日に引き続きⅩⅣトレンチ掘り下げ。

３月６日　前日に引き続く作業の外、現在までの全トレンチの平板測量。

３月７日　ⅩⅥトレンチより黒曜石製石鏃、ⅩⅣトレンチより「塞ノ神式」土器片出土。

３月８日　Ⅱトレンチにおいて認めた溝状の掘り込みから陶磁器片出土。

３月９日　Ⅷトレンチ掘り下げ。耕土下の黒色土層より口縁部を含む土器片出土。Ⅷトレンチにおいては、土層は東から西へゆるく傾斜している。

３月10日　調査手順の検討。

３月12日　Ⅷトレンチ掘り下げの継続作業。

３月13日　Ⅷトレンチにおいて比較的まとまりのある土器の出土状態が認められる。中期～後期初め頃の土器と思われる。

３月14日　Ⅷトレンチでのまとまった出土状態を示す土器は、浅鉢形１、深鉢形２を各々数え、出土状態からみて住居跡内でのものと考え周辺の掘り下げを丁寧に行なったが住居プランの確認は出来なかった。

３月15日　Ⅷトレンチ側に拡張区を設定し、土器の拡がりをみる。耕土層、黒土層は薄く、アカホヤ層に至る。セクション実測を行なう。

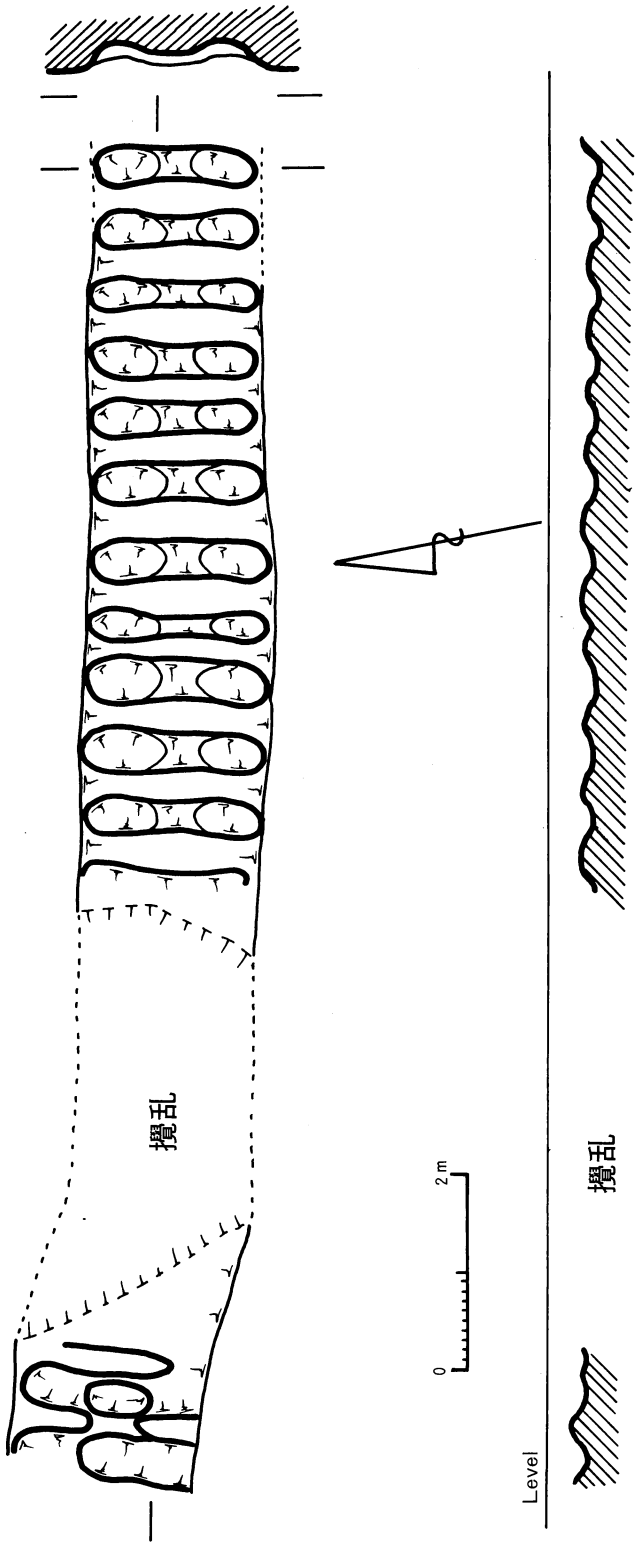
３月16日　セクション実測の継続作業。Ⅷトレンチ出土土器の出土状態の実測図作成。

３月17日　ⅩⅣトレンチ出土土器のドットでの平板測量。

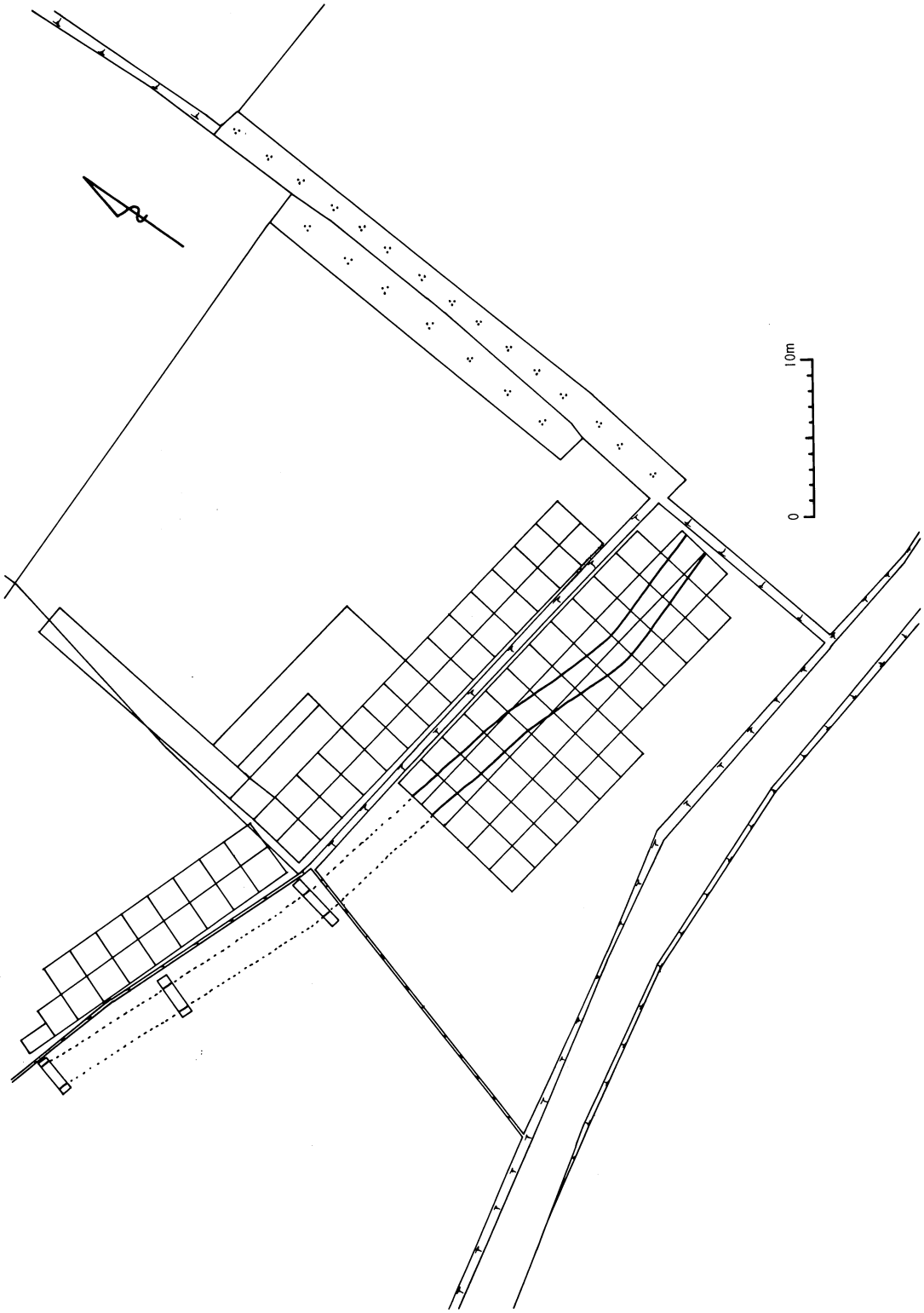
３月19日　地質調査のため宮崎大学教授遠藤尚氏来訪。実測完了分の土器取り上げ。

３月20日　本日までの各トレンチの設定配置図作成のための平板測量。

３月21日　Ⅰ～Ⅲトレンチにおいて確認されていた溝状の遺構の延長を確認するため、試掘壙を三箇所設定。溝状の遺

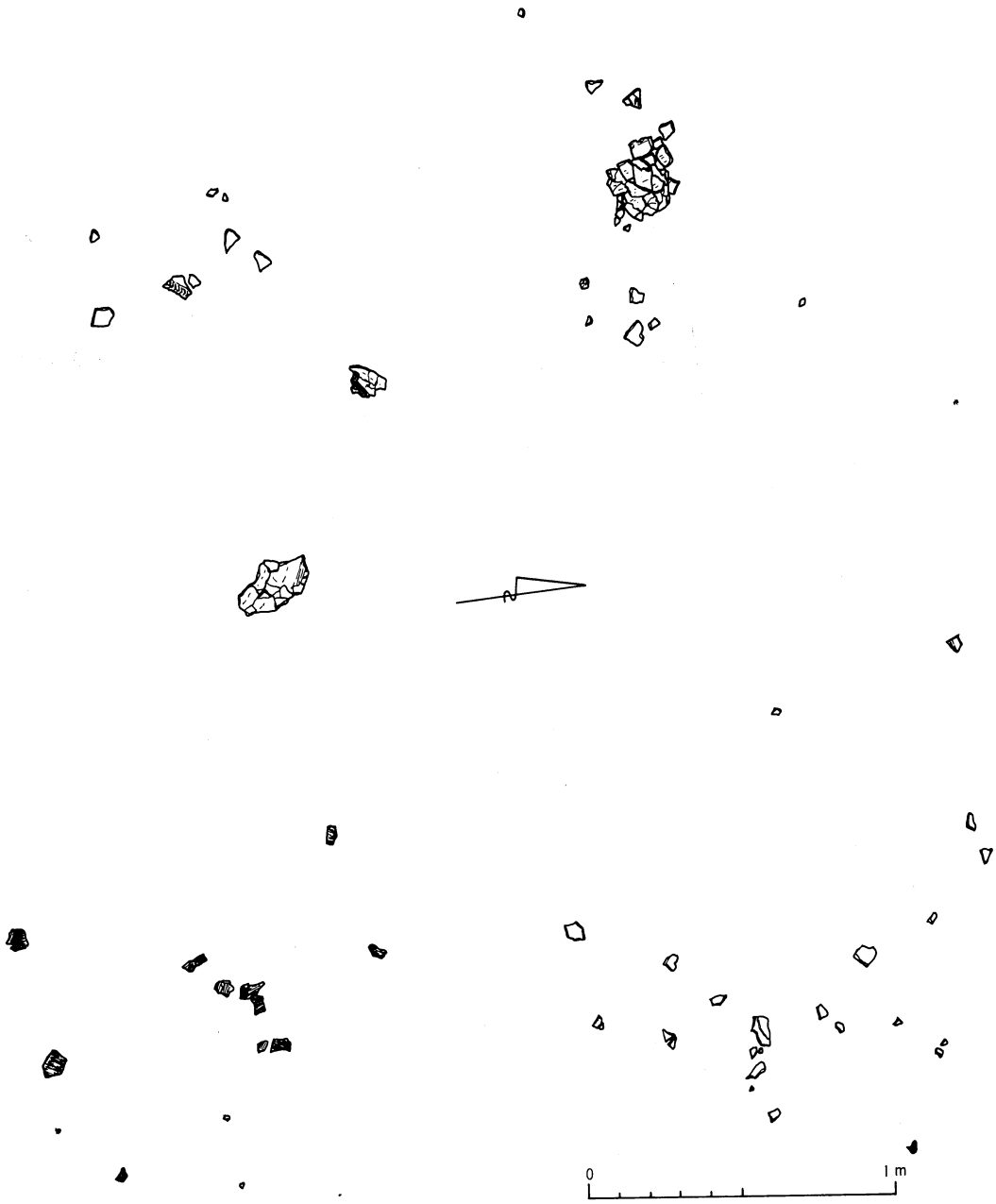


第6図　溝状遺構実測図



第7図　溝状遺構

第８図　トレンチ土層実測図



第９図　Ⅶ・Ⅷトレンチ土器出土状況図

構はまだ延びているものと思われる。

3月22日　土器取り上げ。後赤ホヤまで掘り下げを行なう。出土遺物なし。午後一部埋め戻し、機材撤去。

5．遺　構

Ⅶ・Ⅷトレンチ及びその拡張区での縄文土器の出土状態は、住居遺構の存在を思わせるものであったが、畑地耕作による削平・攪乱が著しく、その検出は困難であった。

遺構としては、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲトレンチにおいて、近世の陶磁器片を混じえた溝状の遺構が検出されたにすぎない（第6図)。この遺構は、ほぼ東西に延びるもので、その延長の状態を調べるため設定した1～3の試掘壙においても確認されており、今回の調査区内を斜めに横断してまだ続くものと思える（第7図)。この遺構は、幅1m80cm～2mのもので、深さ10cm～20cm・幅20cm～40cmの窪みが20cm～30cmおきに連続するものである。また、その窪みそのものも、南北両端に20cm～30cmの窪みの部分があり、こうした凹凸の状態は、先の試掘壙においても認められ、この遺構の性格付けに意義あるものと考えられる。

6．遺　物

(1) 土　器

赤ホヤ下まで掘り下げた、XⅣ・XⅣ′トレンチからは前期土器の出土をみたが、いずれも細片であった。比較的まとまりのある出土状態をみせたⅦ・Ⅷトレンチ及びその拡張区では、「出水式」「小池原式」系の後期土器を一括して検出することが出来た。

前期土器

第10図9～11は、いわゆる「塞ノ神式」土器である。9・10は灰褐色を、11は茶褐色を呈している。焼成は良好で、胎土に細かい石英等の石砂粒を混じえる。いずれも網目状の撚糸文を施しており、9では横沈線がみられる。

第10図7・8は、いわゆる「曽畑式」土器である。表は黒色、裏は暗褐色を呈している。焼成は良好で、金雲母を含んでいる。短線列文と刺突文によって文様が構成されている。

第10図1～3は、いわゆる「轟式」土器である。いずれも微隆起突帯に刻目を施した文様を基本本に構成される。1は、表は褐色、裏は黒褐色を呈し、焼成は良好である。口唇部の内側に刻目を施し、表面には条痕文がみられる。2・3は、表は赤褐色、裏は黒褐色を呈し、焼成は良好である。

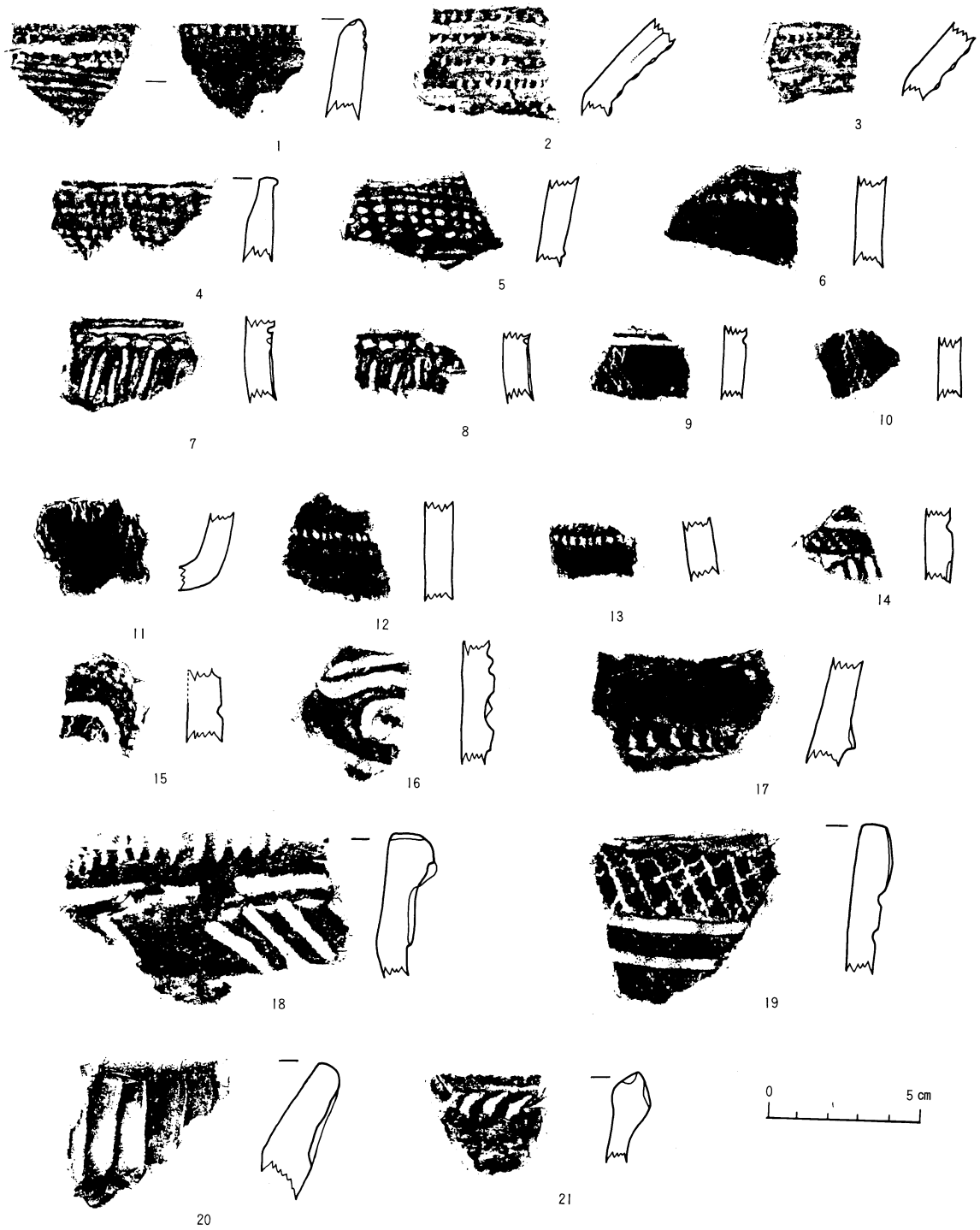
後期土器

第10図14は、磨消縄文系の土器である。焼成は良好で、明褐色を呈し、微砂粒を胎土に混じえる。縄文を施文した地を横沈線と縦位の沈線列文によって区画している。

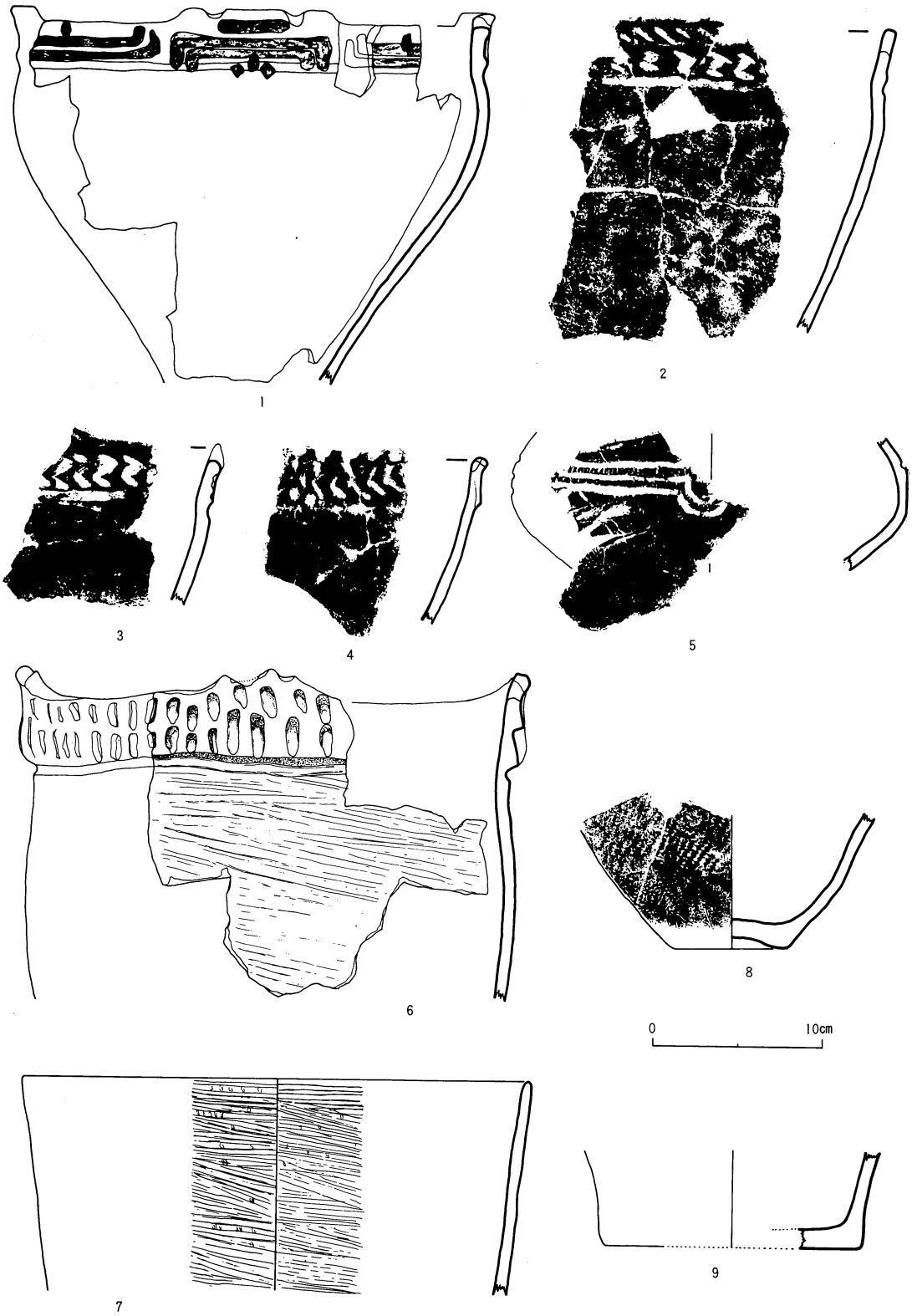
第10図15は、貝殻腹縁文の地を太い沈線によって区画するものである。灰褐色を呈し、焼成は良好であり、砂粒を胎土に混じえる。

第10図16は太い沈線によって曲線文を構成するもので、「綾式」系統の土器とみられる。表は黒褐色、裏は褐色を呈し、焼成はさほど良好ではない。

第10図17は貝殻文を施文するものである。煤を付着し、灰黒色を呈する。焼成は良好で、砂粒を



第10図　土器実測図・拓影(1)



第11図　土器実測図・拓影(2)

胎土に混じえる。

第10図18は、口縁部片で、口唇部に刻目をもつ。石英砂を胎土に混じえ、赤褐色を呈し、焼成は良好である。横位・斜位の沈線と瘤状の貼り付け２個をもつ。

第10図19は、貝殻腹縁文を網目状に構成し、二条の沈線を口縁下にもつものである。口縁は山形口縁をなすもので、黄褐色を呈し、焼成は良好で、胎土には石砂粒を混じえる。

第10図20は、「く」の字に外反する口縁部にヘラ切りの縦位の沈線様の文様を施すものである。赤褐色を呈し、焼成は良好であり、石砂粒を含む。

第10図21は、貝殻腹縁の刺突文をもつもので、地文には条痕文が施されている。表は赤褐色、裏には炭化物を付着する。焼成は良好で、小砂粒を胎土に含む。いわゆる「市来式」系統の土器である。

第11図１は、太形のヘラによる沈線を口縁部にのみ施文するものである。暗黒褐色を呈し、石英砂を胎土に混じえ、焼成は良好である。沈線の太さ、文様が口縁部に限られ、また口縁部が肥厚化する特徴は、いわゆる「南福寺式」「出水式」にみるものである。

第11図２～４は、いわゆる「出水式」土器である。２は、表は褐色、裏は暗褐色を呈するもので、焼成は良好である。斜位の短沈線の下段に逆「Ｓ」字状文を構成し、胴部と口縁部の間は、太い沈線によって区画されている。３は、表は黒色、裏は黒褐色を呈するもので、２と同じく口縁部の文様帯は太いヘラ沈線によって区画されている。逆「Ｓ」字状文を施文し、口縁は山形をなす。４は、黒褐色あるいは褐色を呈するもので、焼成はさほど良くない。口唇部には内外に太い刻目をもち、「「く」字状文を連続して施文する。粘土の折り返しによって口縁部を若干肥厚化させ、胴部に文様帯を区画している。３点とも横位・斜位の擦痕の調整を表面に残し、裏面はヨコナデ調整である。

第11図５は、いわゆる「小池原式」の系統に属する、比較的小形の土器である。貝殻偽縄文を沈線により区画する。赤褐色あるいは褐色を呈し、焼成は良好である。一部に煤を付着させている。内面はヘラ磨きにより丁寧に研磨されている。

第11図６は、肥厚化した口縁部に、ヘラによる太く深い短沈線を縦位に施すものである。胴部は貝殻条痕文を残し、黄褐色を呈し、煤を付着させている。山形の口縁には刻みが施されている。また口縁部と胴部は太い沈線で区画されている。

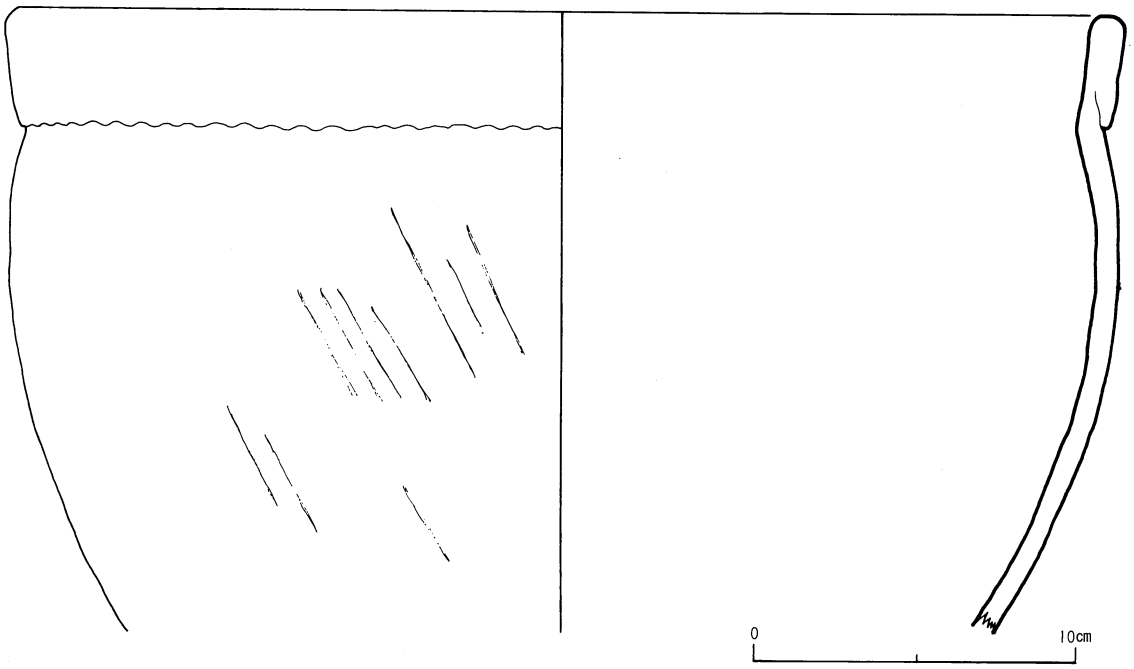
第11図７は、黒褐色を呈する薄手の土器である。全体が貝殻条痕文によって被われ、所々に小さい凹みが生じている。焼成は良好で煤を付着する。

第12図は、口縁部が肥厚化した無文の土器である。黒褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には石英砂を混じえる。

その他

第10図４～６・12・13は、貝殻の回転押捺による文様を構成するものである。４は口縁部で口唇に向かう程先き細りとなる。黒褐色を呈し、焼成は良好で、砂粒を胎土に混じえる。５は、表は黒色、裏は褐色を呈し、焼成は良好である。下位に細隆起突帯をもつ。６・12・13は黒褐色を呈し、焼成は良好である。石英砂を胎土に混じえる。これらはいずれも前期「轟式」の系統に属するものと推定される。

底部片では次の二点が出土している。第11図８は貝殻腹縁文を器面に施すもので、黄褐色を呈している。焼成は比較的良い。内面の整形は粗雑で、底はやや上げ底ぎみになっている。第11図９は平底の底部で、暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土・色調・調整等からみて、第11図１、第12図の後期土器と共通しており、それらに属する底部と思われる。



第12図　土器実測図(3)

(2) 石　器（第13図）

石器製品では、石鏃・石匙が認められているほか、多数の剝片と石核（黒曜石、チャートなど）が出土している。

石鏃は、完形品及び未製品と思われるものを含め19点が出土している。1～3、5、7、10、11、14、16が第Ⅰ層出土で、4、6、9、15が第Ⅲ層中より出土している。

石鏃の形状は、基部の抉入が大きく長脚的なもの（1、5、6、7、8、9、15)、同じく二等辺三角形状をなすがさほど基部の抉入が大きくないもの（2、3、4)、基部に対し高さの低い正三角形に近いもの（10、11）などが認められる。この内、12のものは基部抉入の大きい五角形状のものであり特異な形状を示している。また、16は基部に抉入のない無茎鏃で、粘板岩製のものであり、特異なものといえる。

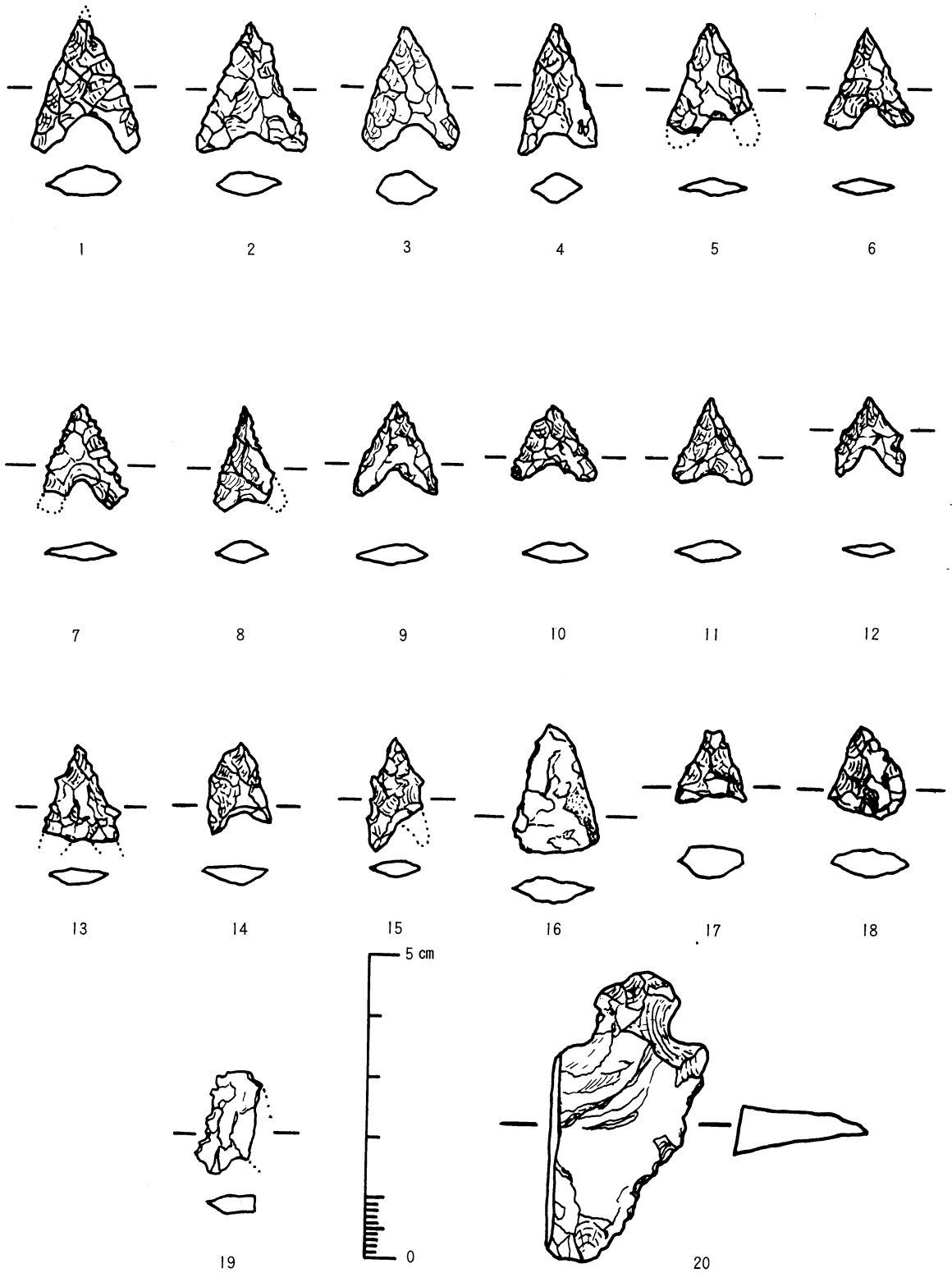
ほとんどの石鏃が交互剝離によって調整されており、また石鏃の欠損部はすべて脚部に限られている。

石匙は、縦形のもの1点のみである。片面は第1次剝離面をそのまま用い、刃部はその反対面のみ片側剝離によって調整されている。つまみ部の抉入は、一応両面から剝離が行なわれているが、さほど入念な調整は施されていない。

石　器　一　覧　表

番号	石質	層位	全長	厚	最大幅(基部幅)	形状	基部抉入
1	黒曜石	Ⅰ層	2.2	0.5	1.8	二等辺三角形	0.6
2	チャート	〃	2.1	0.4	1.9	〃	0.3
3	〃	〃	2.0	0.5	1.6	〃	0.4
4	〃	Ⅲ層中	2.2	0.5	1.4	〃	0.3
5	〃		(1.7)	0.3	(1.4)	〃	(0.2)
6	チャート	Ⅲ層上	1.7	0.3	1.5	〃	0.4
7	〃	Ⅰ層上	1.7	0.3	(1.4)	〃	0.4
8	黒曜石		(1.7)	0.4	(1.0)	〃	(0.2)
9		Ⅲ層	1.5	0.4	1.4	〃	0.4
10	黒曜石	Ⅰ層	1.2	0.4	1.4	正三角形	0.3
11	チャート	〃	1.4	0.4	1.3	〃	0.1
12	〃		1.3	0.2	1.1	五角形	0.5
13	〃		(1.6)	0.3	(1.3)	二等辺三角形	(0.1)
14	〃	Ⅰ層	1.5	0.3	1.1	変形	0.4
15	〃	Ⅲ層	1.8	0.3	0.9	二等辺三角形	0.3
16	粘板岩	Ⅰ層上	2.1	0.5	1.5	〃	0
17	黒曜石	Ⅲ層	1.2	0.5	1.2	正三角形	
18	チャート		1.5	0.5	1.3		
19	粘板岩		1.7	0.4	(1.1)		
20	チャート	Ⅰ層	4.8	0.8	2.5	(石匙)	

（　）内の数字は、現状の長さ



第13図　石鏃及び石匙実測図

7．結　語

本遺跡の発掘調査は、田野町黒草遺跡と同様に、耕作などの過去の削平・攪乱が著しく、遺構の検出包含層位の確認は困難なものとなった。しかし、従来県内においては稀薄であった後期初頭とみられる縄文土器に、比較的良好な共伴関係を保つ一群の土器類を検出することが出来、その一例を加えることが出来たことは特記すべきであろう。

縄文中期「阿高式」の系統をひく「南福寺式」「出水式」は、東部九州にみられず、「綾式」の分布が西北九州にみられないことと対照をなすものとされている。(注2) 本遺跡は、その地理的位置から両型式の土器にとって示唆的なものとなった。

第11図・第12図に掲げた土器は、一括して共伴関係の内にある。第11図１～４の、太形の沈線によって口縁部にのみ施文する土器は、いわゆる「出水式」の典型を示すものである。また、第12図の口縁の肥厚化した無文の深鉢形土器も、「出水式」の指標となった出水遺跡(注3)においても共伴しており、「出水式」の多様性の中でとらえることが出来るものである。一方、第11図５の土器は、いわゆる「鐘が崎式」の系統をひく「小池原式」系の土器で同じく共伴の関係にあることが知られた。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲトレンチにおいて確認された溝状の遺構は、規則的な特色ある形状を示しており、然も長距離に亘ると推察されるので、その性格付けには鹿児島県とも協力して、徹底的な遺構の調査結果に待たなければならない。

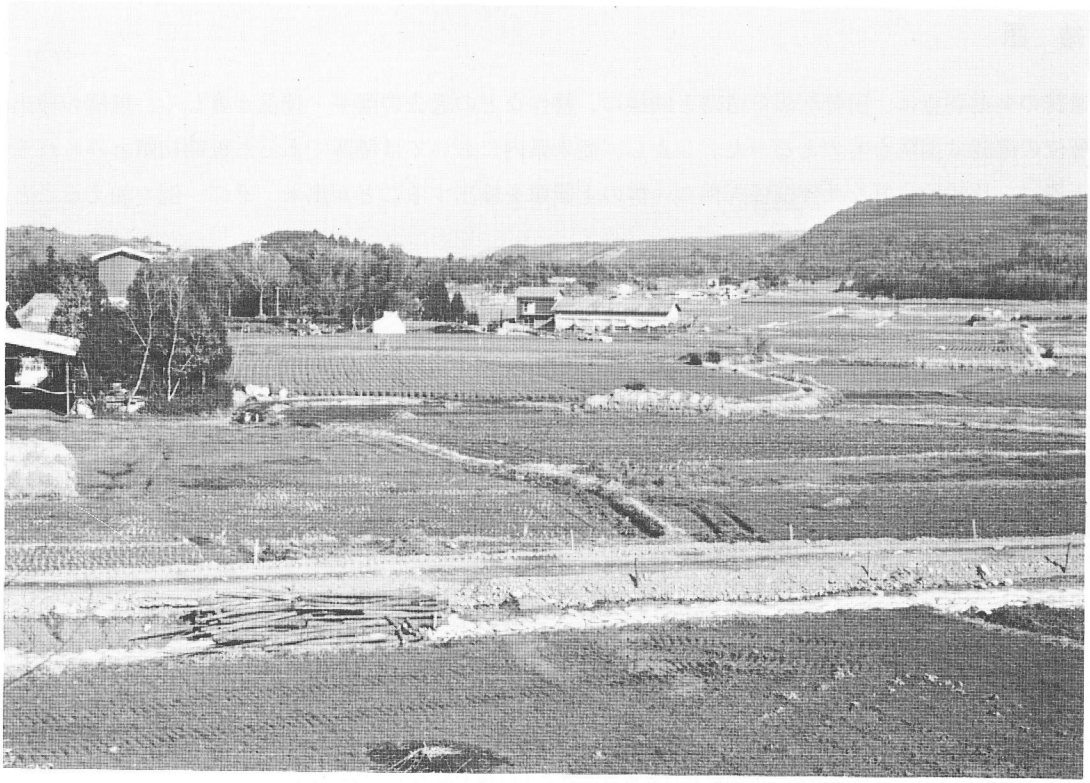
（北郷　泰道）

注１　宮崎県教育委員会『灰塚遺跡』九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(2)　昭和48年

注２　乙益重隆「九州西北部」『日本の考古学』Ⅱ縄文時代

注３　『薩摩国出水郡出水町尾崎貝塚調査報告』京都帝国大学文学部考古学研究報告第六冊　大正10年

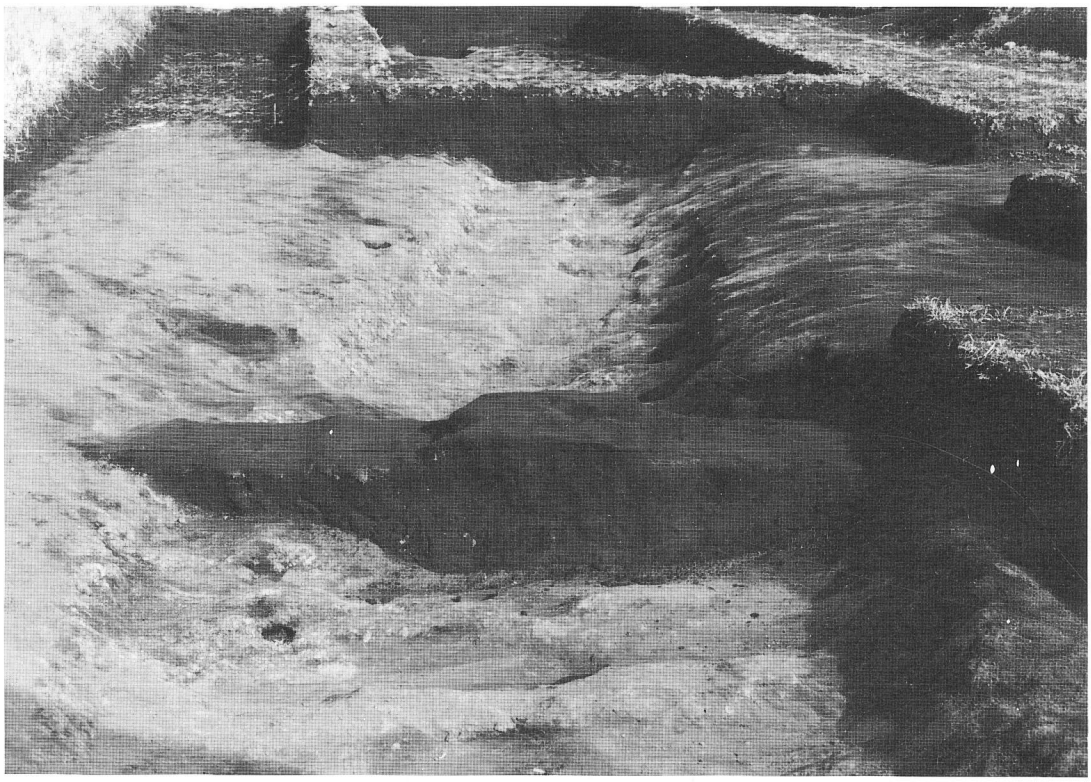
図版1

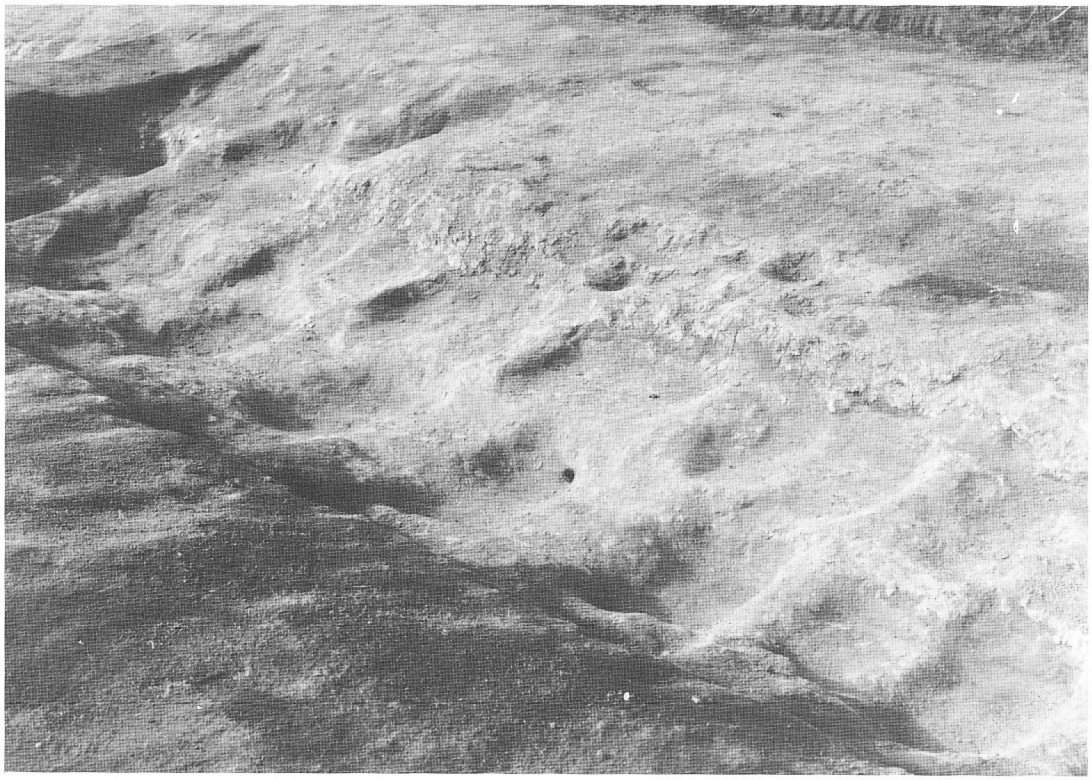


(1) 調査区遠景

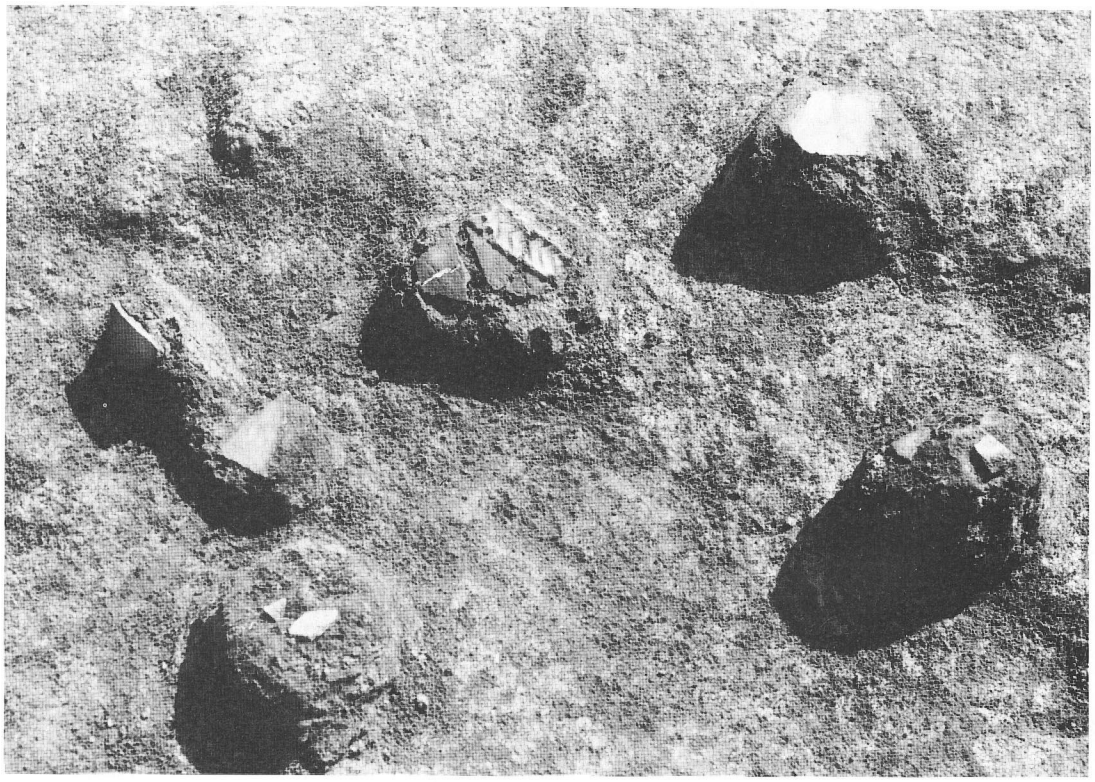
(2) 調査区近景

図版2

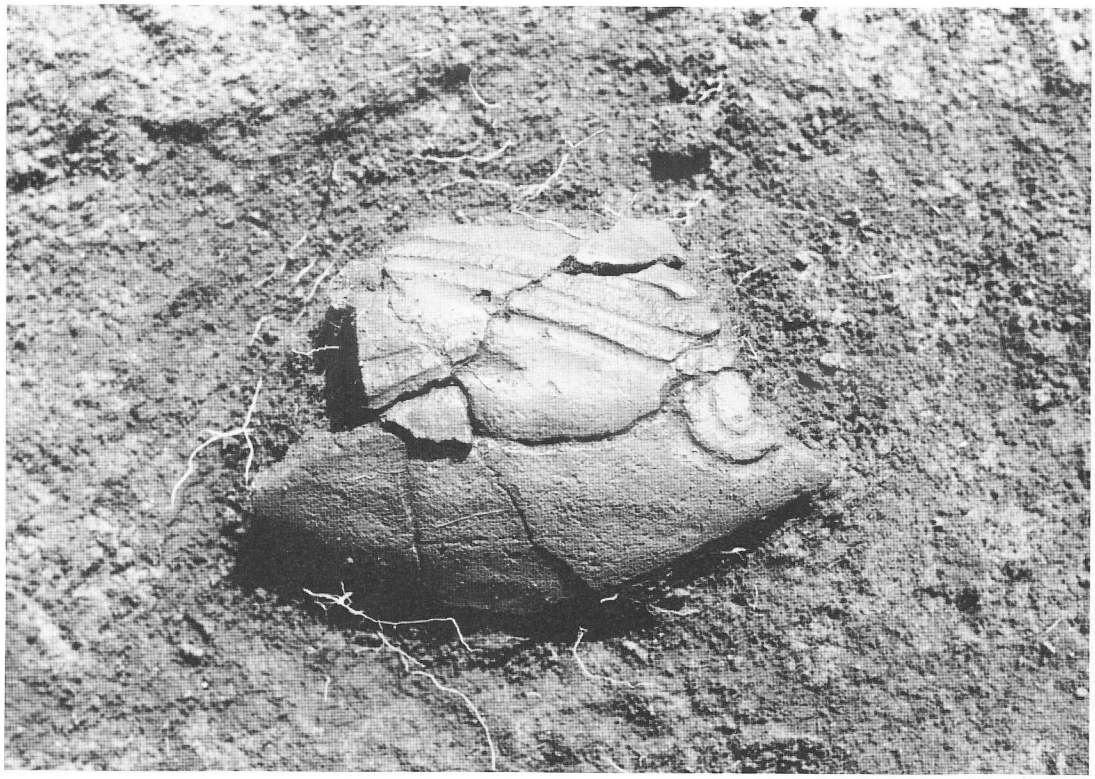




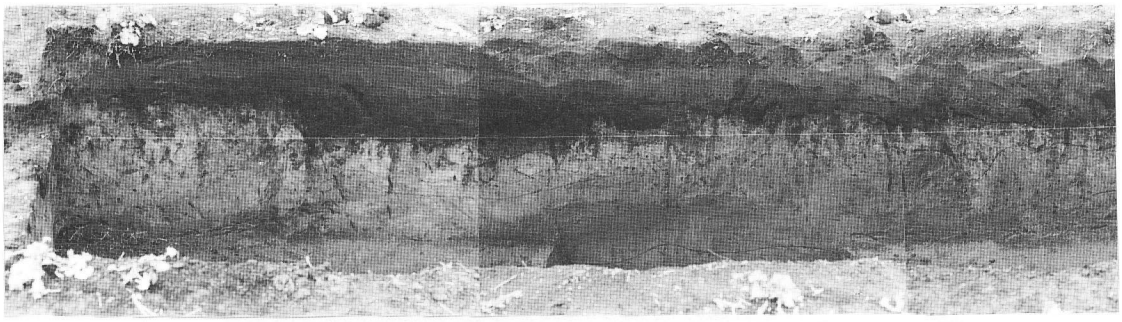
1～3トレンチ溝状遺構

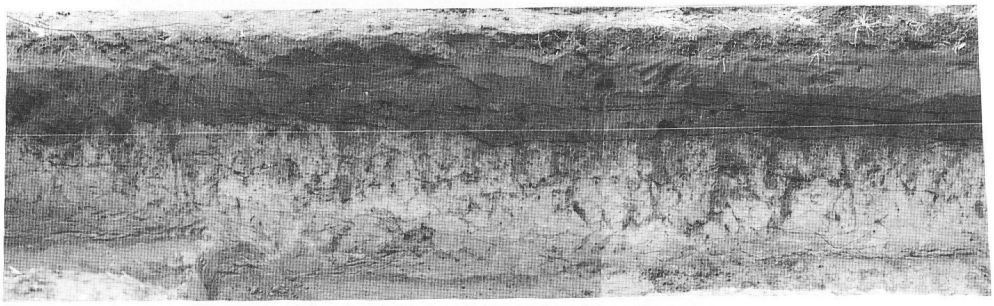


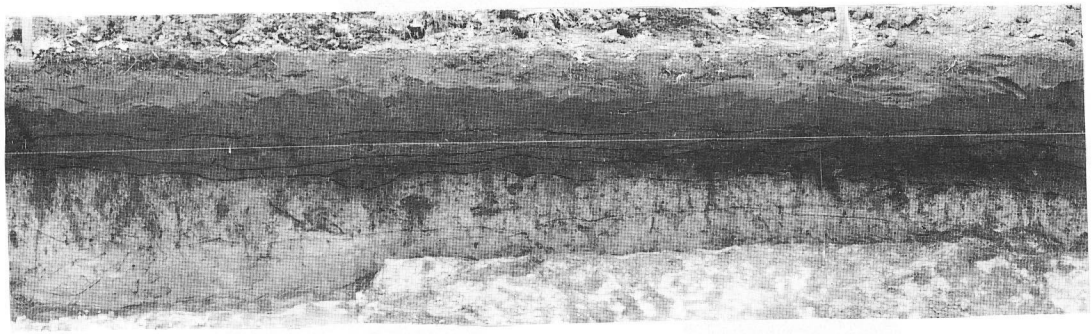
(1) 「出水式」土器出土状況

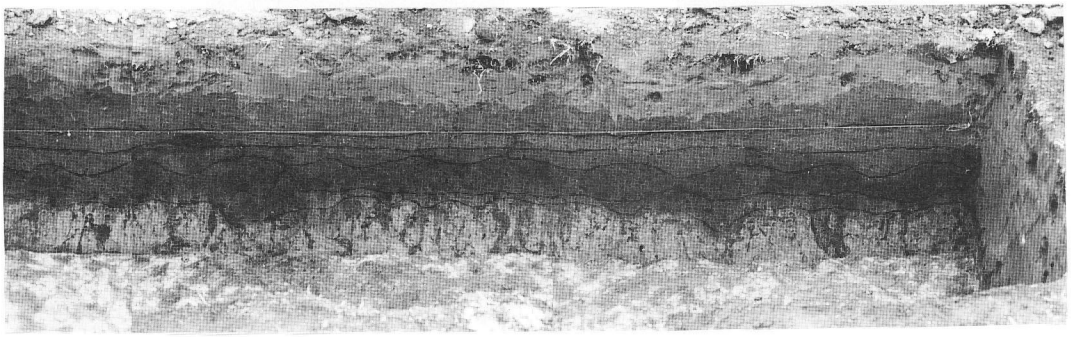


(2) 「小池原式」系土器出土状況



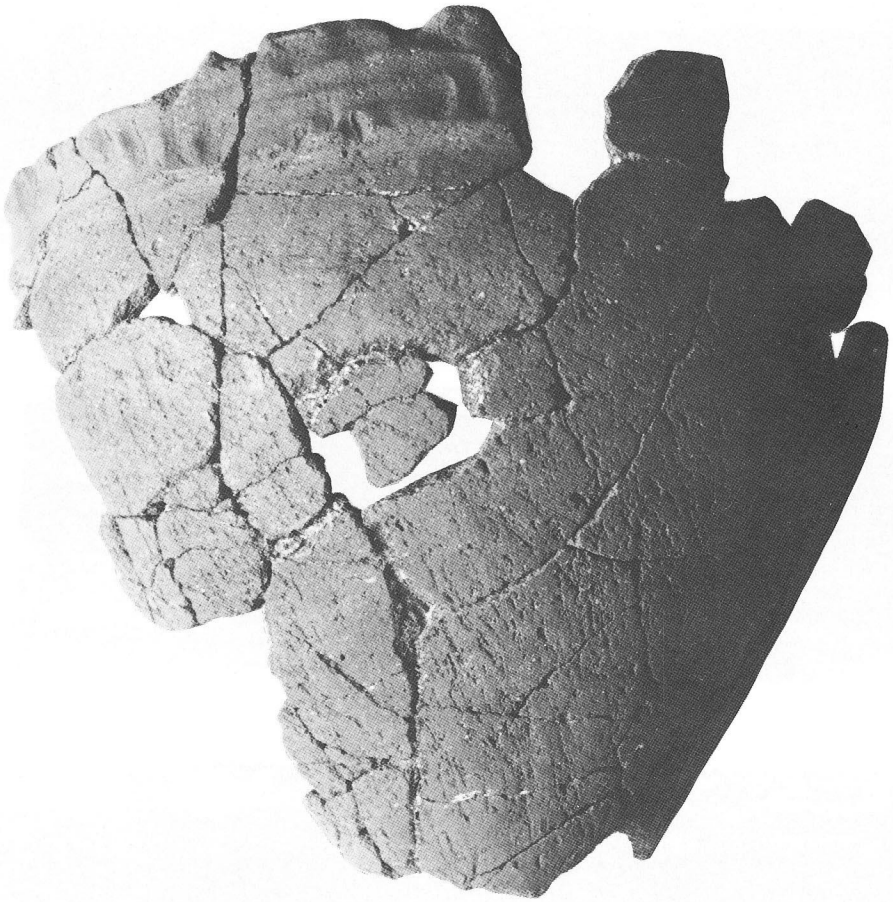






トレンチ土層

図版5



土器 (1)